

江戸名所圖會

六

分三
井田
ル 4
5105
6





本牧十二天宮 本牧の塙ありと真言宗多聞院別當奉祀

も祭神ハ十二天神躰ハ海上出現と云尤佳景の地なり神

奈川の臺より眺望もこの絶壁ハもあつり此社の右に

裏手小聳立ちもこの巨巖こそなつと巖頭数株の松梅

鬱蒼と云々栄茂せり 本牧の地ハ川田原北条家の分限帳に左邊の

大領由んえ云々此地ゆへ百世同橋本

吾妻明神社 同所六町斗南の方原宿といふあり相傳ふ

天和年間此地の獵人吉太夫といふもの此海上は網を投

當社の神躰を得ると 本像ハ髪髻の雛の依る小祠を

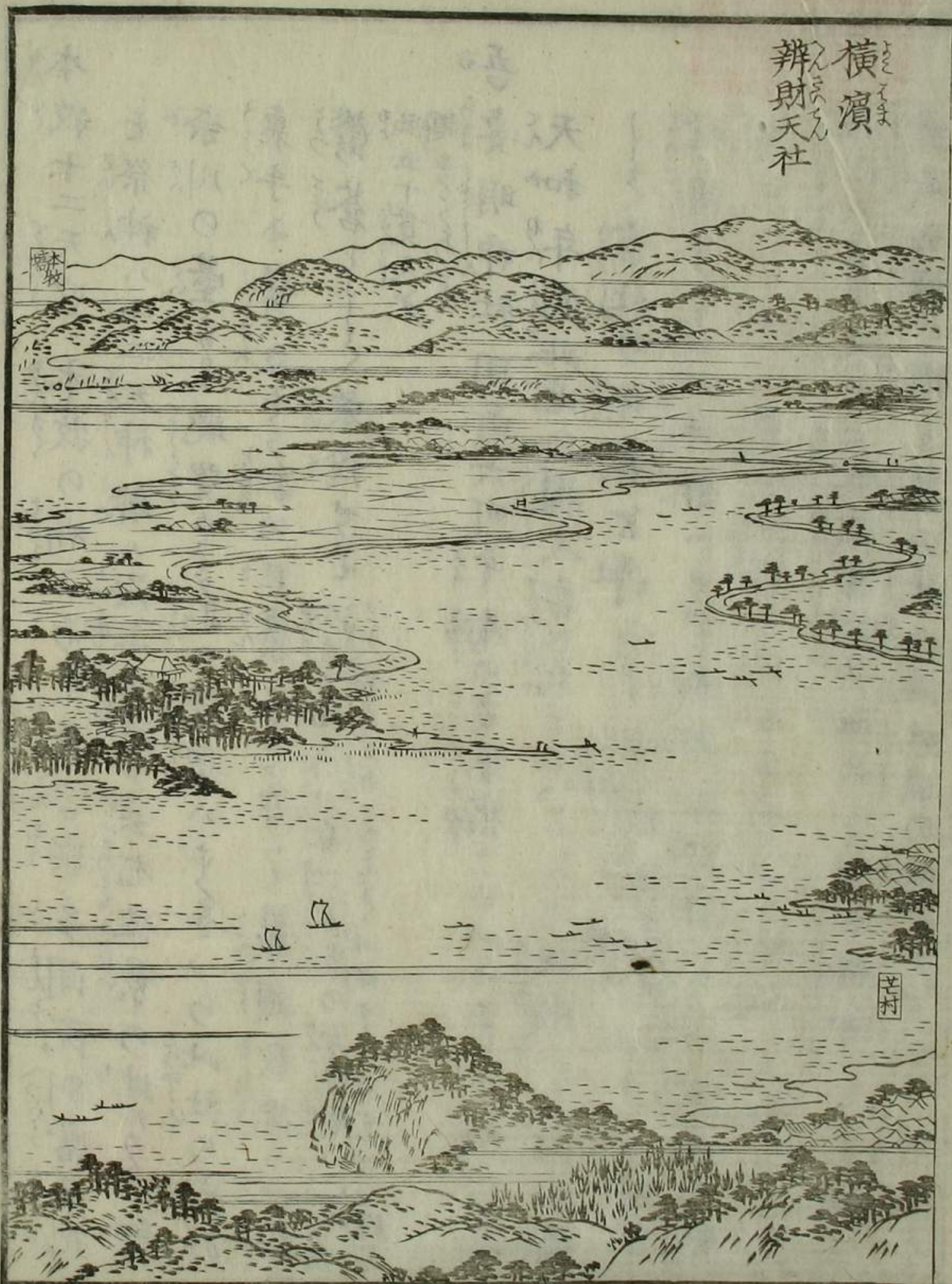
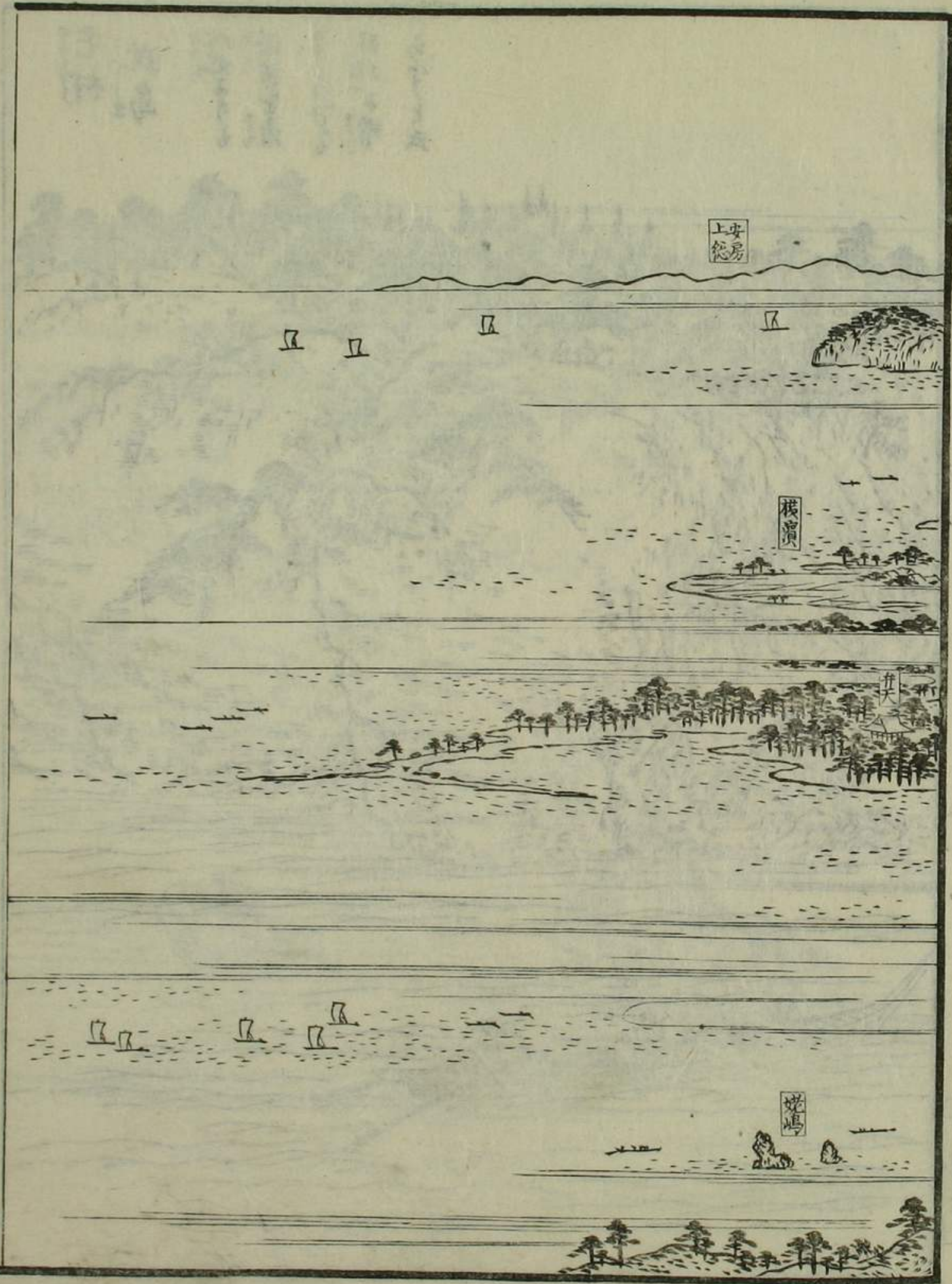
營建と云此神躰ハも南總亦更津吾妻明神の神

像ゆへ浪も漂ひ此地止まをり祭神ハ人皇十一代

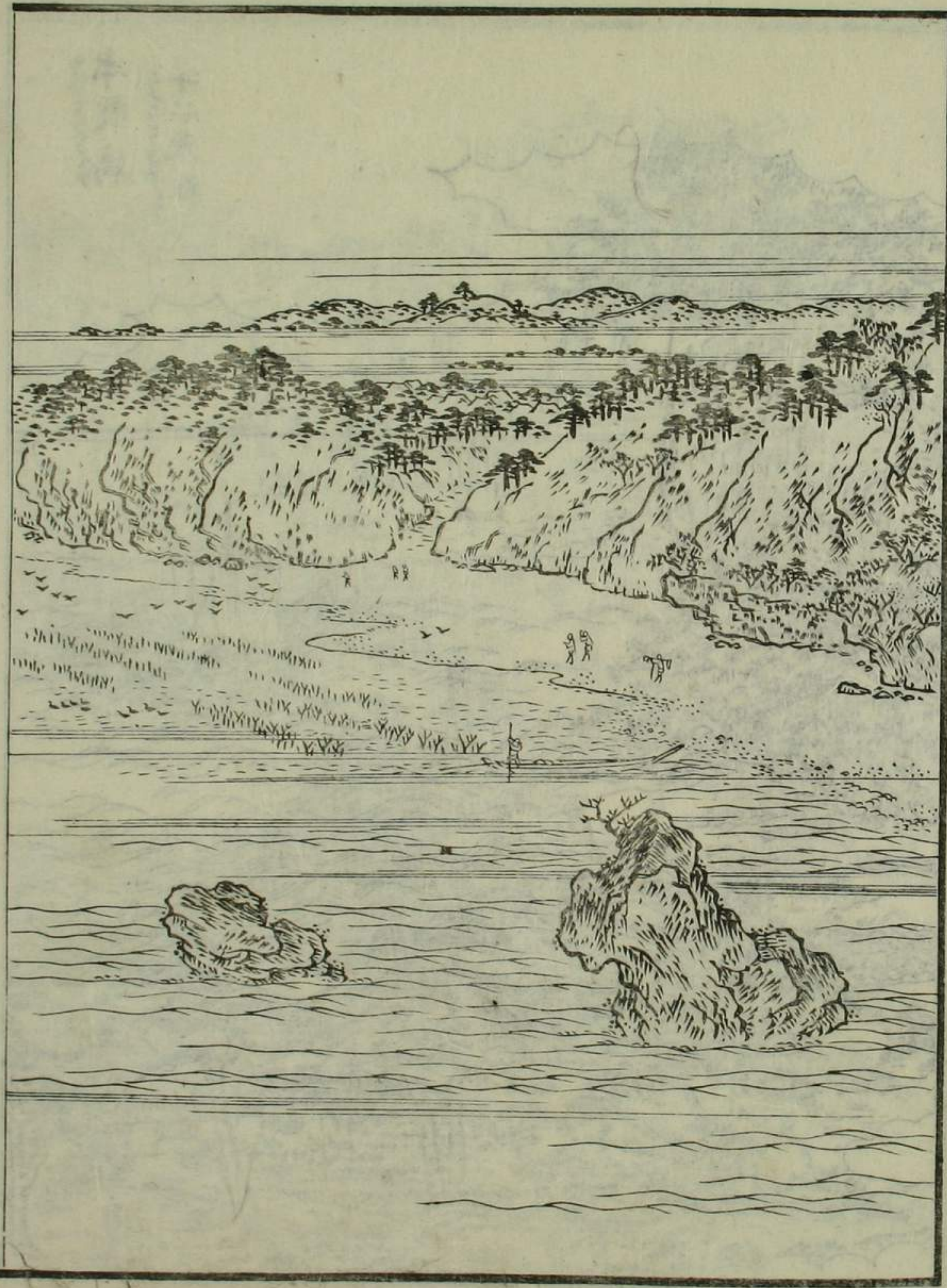
垂仁天皇の皇子日本武尊初の御名と云小碓命と云奉る

武藏相模の際と尊の東征御經過の地と云て以て所々

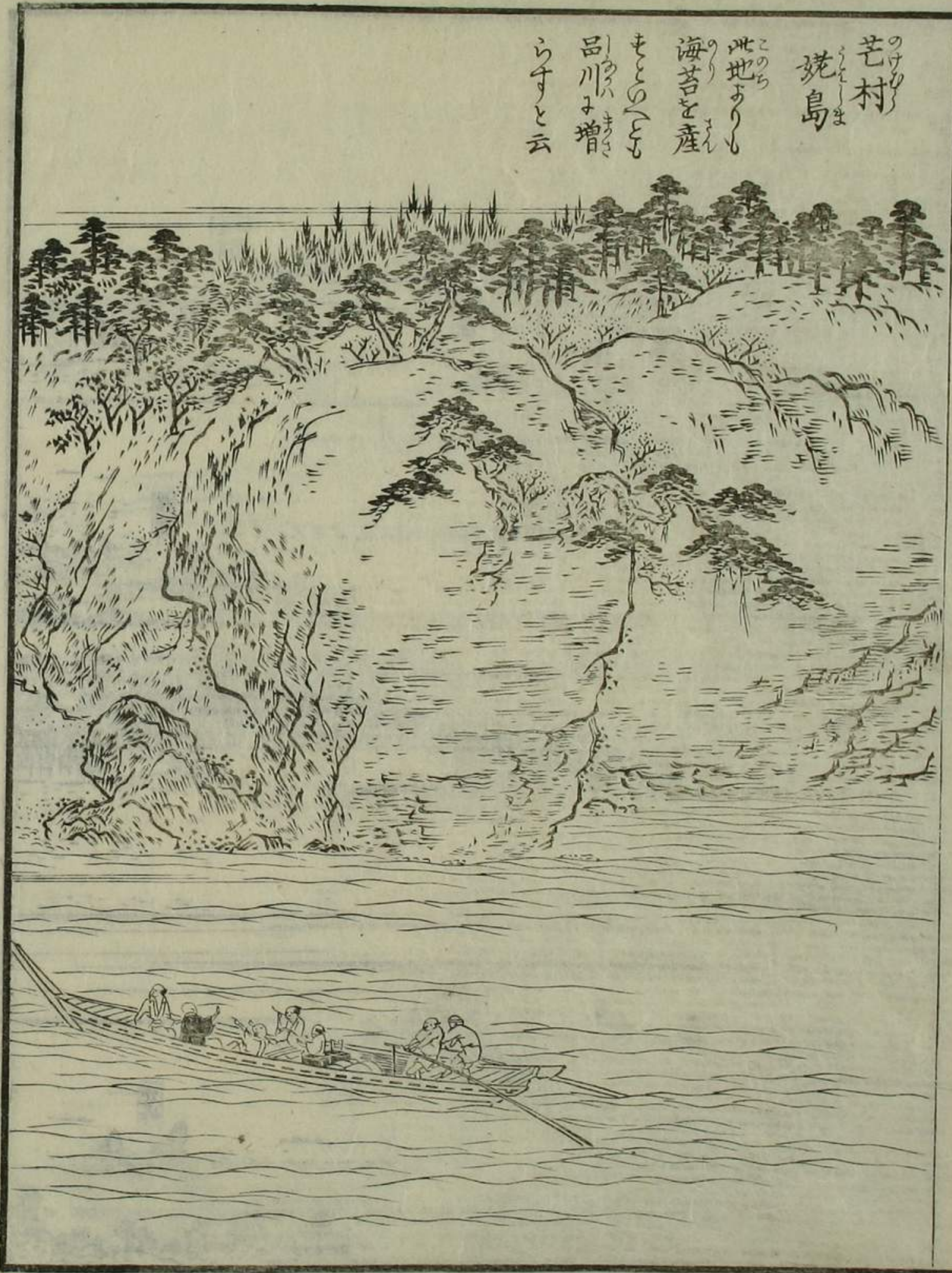
昭和41年12月20日寄
原安三郎氏贈



天
丹
二
ノ
百
三
十
九



のり
 芒村
 うま
 焼島
 このち
 此地ありし
 海苔を産
 もとの
 呂川子増
 らすと云





かんりのまか
 本牧塙
 あふてんのすう
 十二天社



本牧
吾妻権現宮



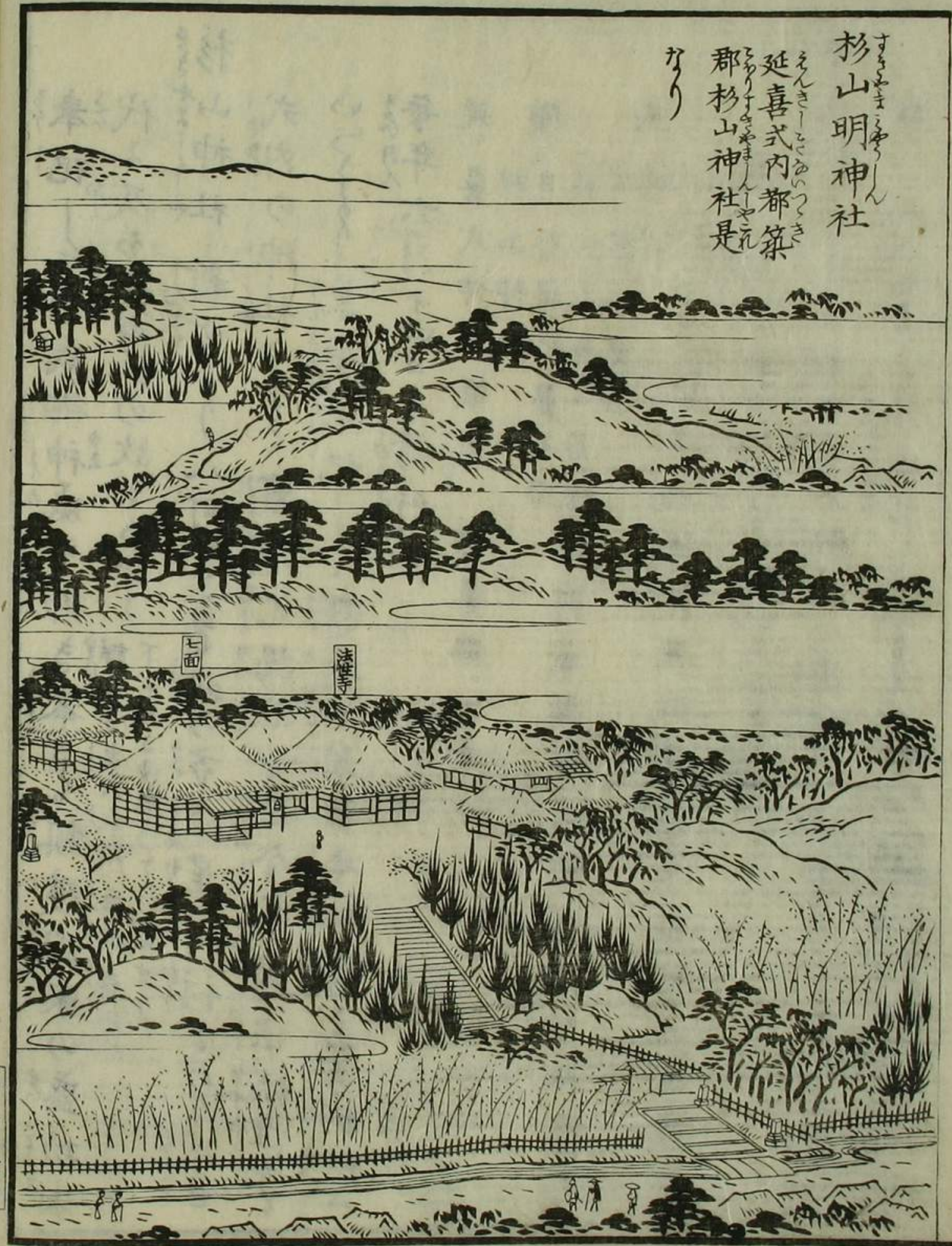
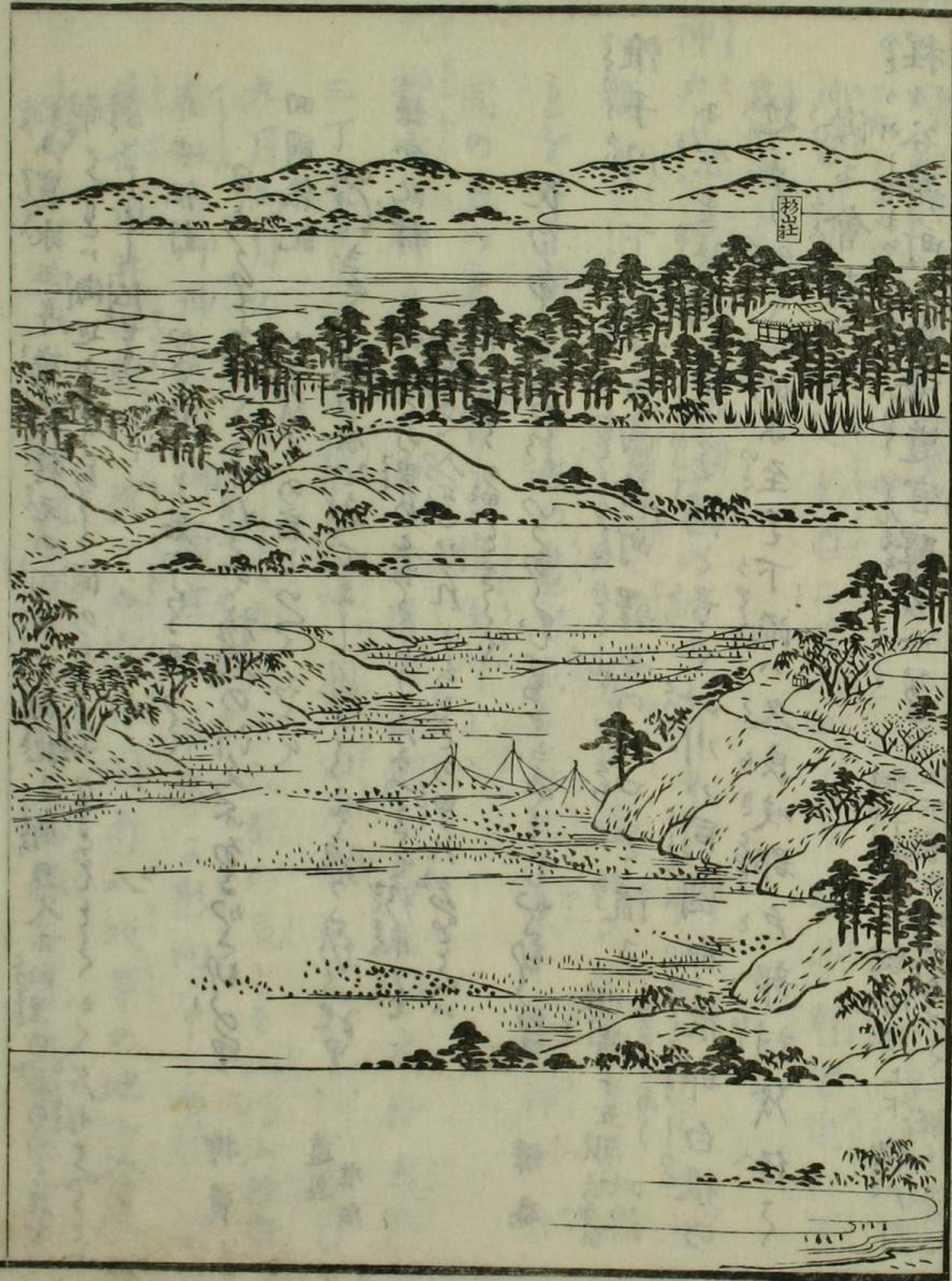
本牧の地ハ
神奈川澤の
南に續きて
海上に鋭き岩
一方の系地不
して勝區以
探る人ありく
乃をある取と
又へり按むるふ
本牧の名あり六
昔時牧馬の地
うるゆふふの稱
ありの記今
海利魚鹽の淵と
あり漁人の家多く
おふ魚とて東海の
澤路及び東郡は
市や運輸
需ぐあふべし

奉祀して千歳御神威を仰ぎ奉るも鎮護國家の盛功未
代よ及びりゆふの故あるべし
詳ある事ハ本所吾孺森の
下よゆふふに尋せり

杉山神社 新町より八町あり北の方下星川村より延喜
式内の神社や々々靈蹤尤揭然たり今ハ日蓮宗法性寺と
いへり兼帯奉祀して釋迦如来を本地佛とせり例祭ハ
毎年六月十四日修行也

延喜式神名帳曰 都築郡一座小
續 杉山神社
日本後紀第七曰
美和五年二月庚戌武藏國都築郡粉山神社預之
同 官帶以靈驗
書曰 十五年五月庚辰奉授武藏國无位杉山名神從
五位下

惟子里芝生の南よ並み往古ハ宿驛の名なりし今ハ程ヶ谷
驛よ加へりし小地名とあるなり
此所を下帷子と名け岩間
神の南よあるを上帷子と



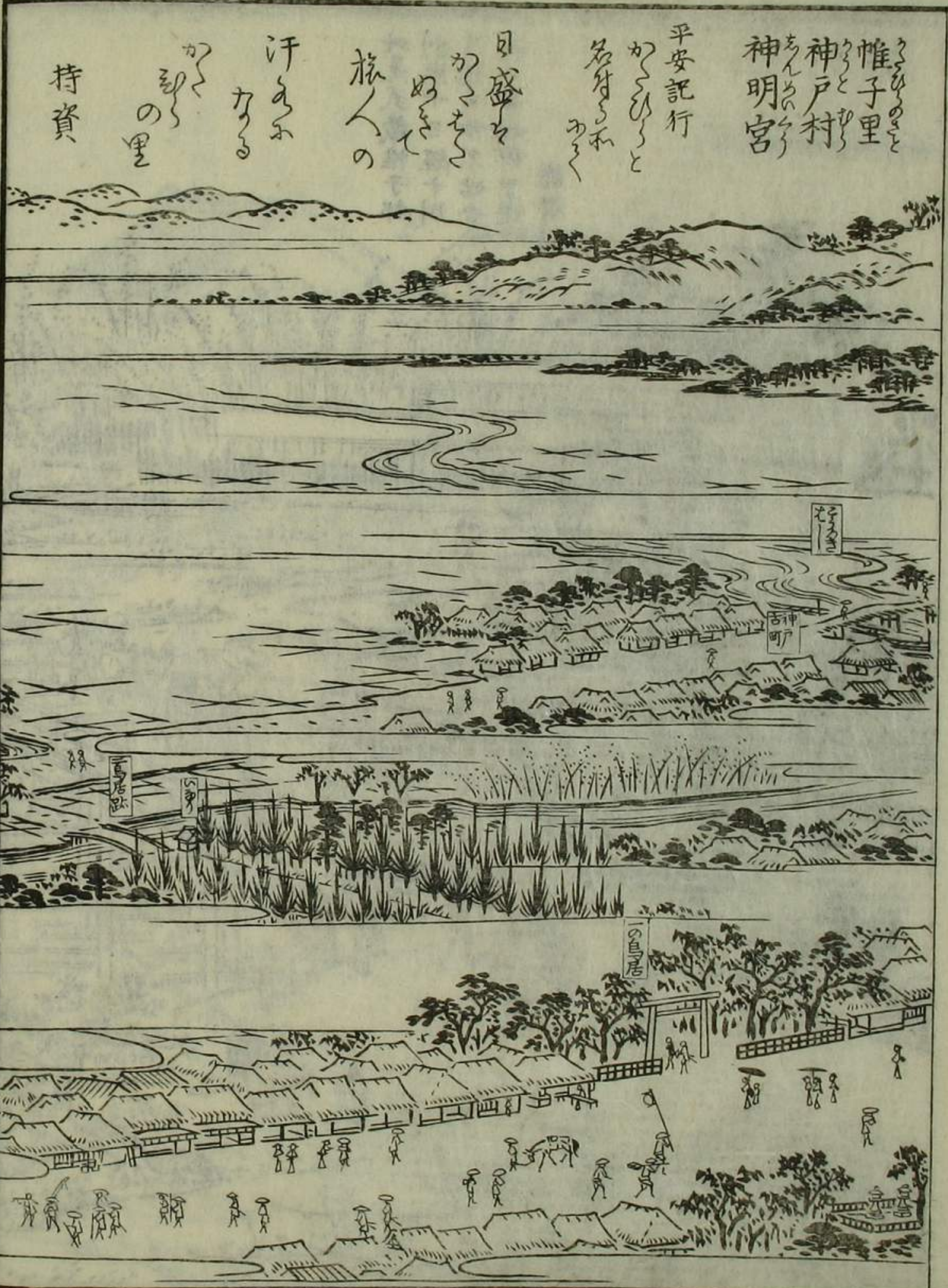
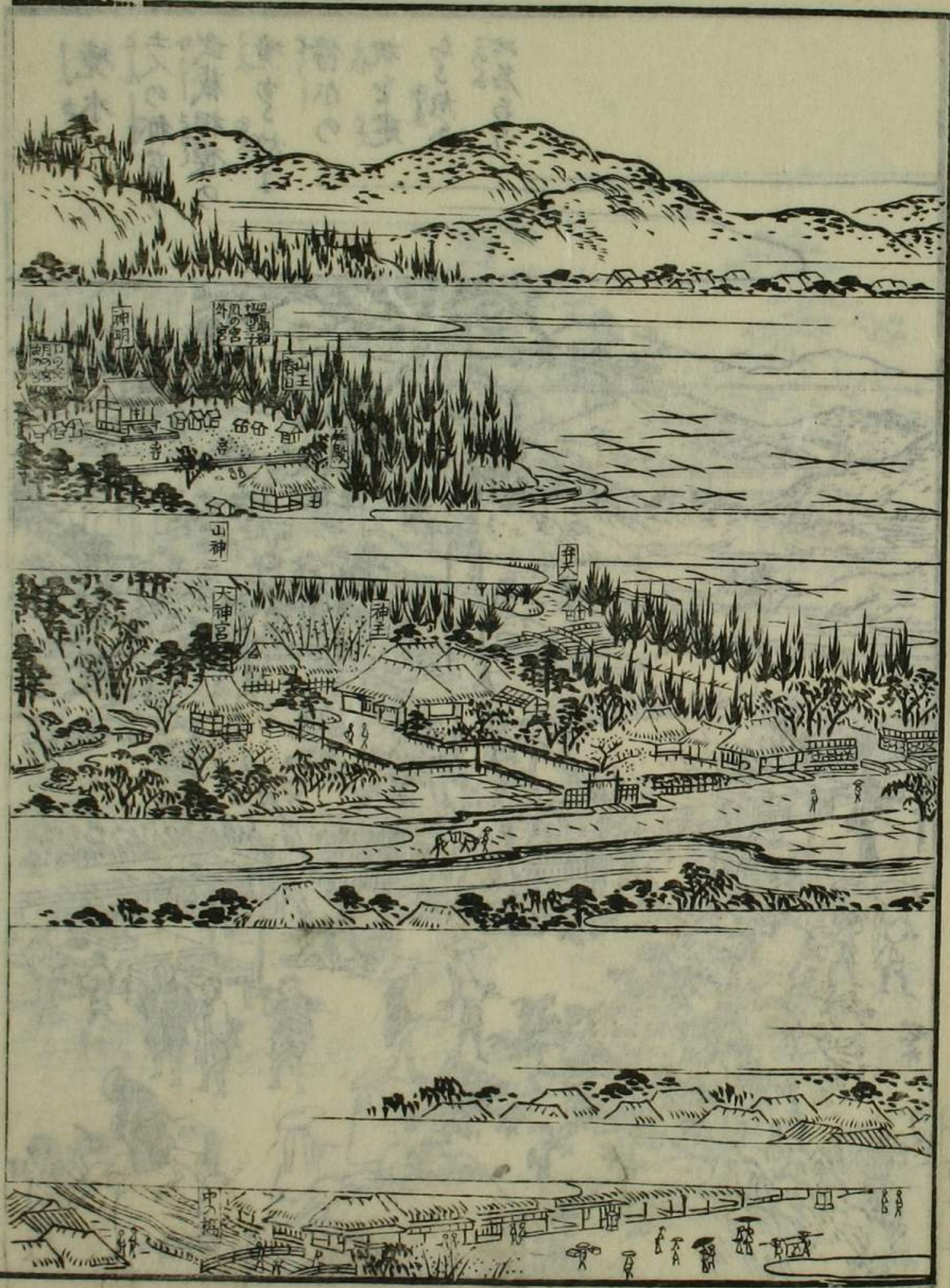
杉山明神社
延喜式内都築
郡杉山神社是
なり

此是武藏帷子郵
 別家十日經十州
 只思父母不姑舍
 夜々夢魂鄉里遊
 闇齋



帷子川





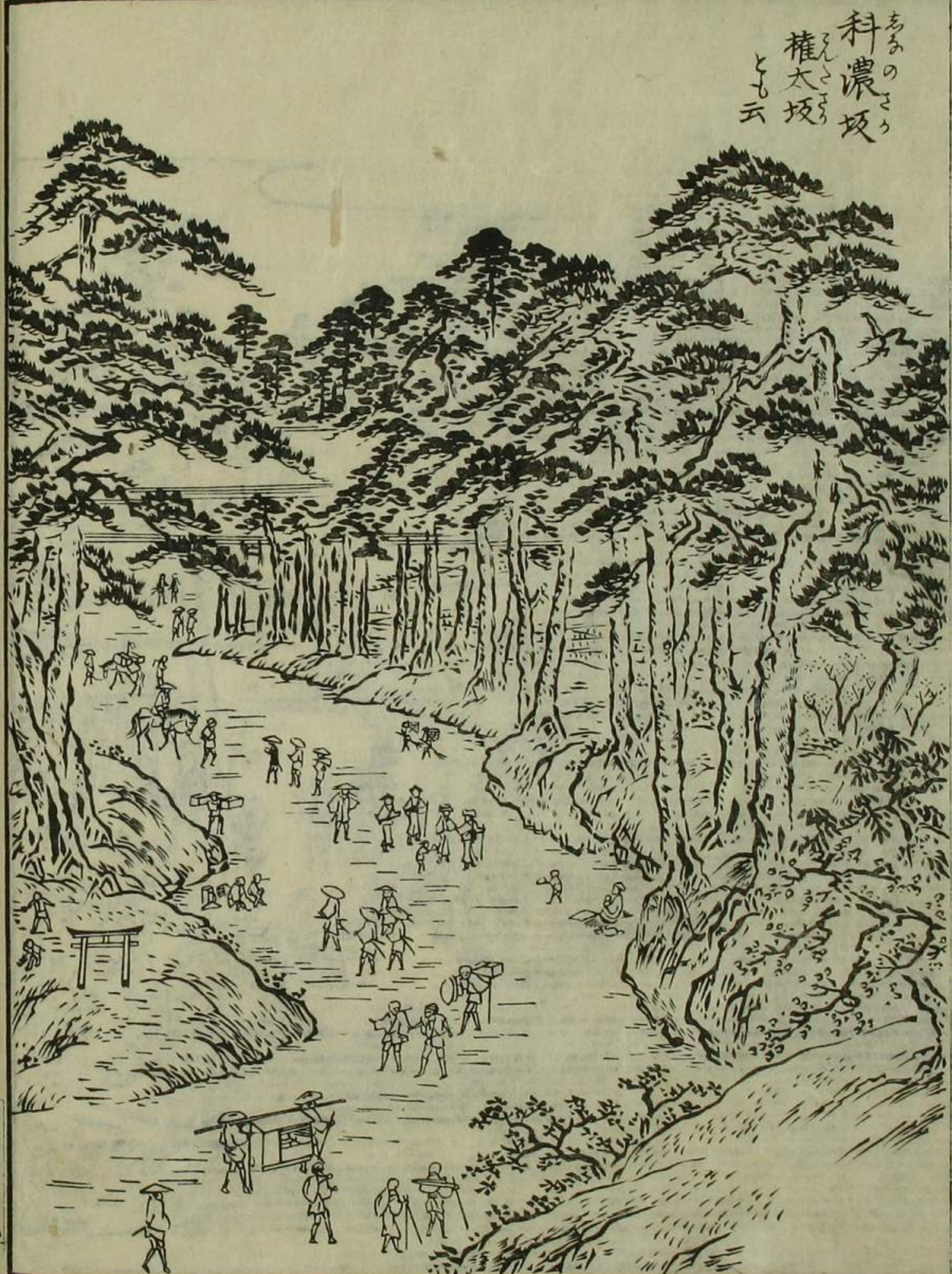
平安記行
 かきつと
 名付ふ
 日盛々
 かきつと
 ぬき
 旅人の
 汗あふ
 カッ
 かく
 の里
 持資
 帷子里
 神戸村
 神明宮



境木
 土人の称なり
 武蔵相模の
 境あり故に
 傍尔の
 柁を建
 らせし
 らるなり
 此名あり



あみのさう
科濃坂
権太坂
とも云



此山上より迂一せし又元和二年三月三日今のゆく平地へ

宮居と造立を云見目河神田春日天神町等の地より

古町街道 芝生の追分より下帷子の右の裏通りを程谷の

元町へゆる通路中へ行程十八町あり則古の街道

なり万治二年慶安長或ハ今今今のゆく通路を改られより裏

通を古町街道と稱一今の驛舎を新町と名一なり

帷子橋造香の路ハ此古町

御道と往還の通路と也

界水 立場あり道より右は武蔵相模の國界の傍尔城

建るる此称あり此地牡丹餅を名産とを是を製する店

兩三家あり

品野坂 或ハ信濃又 俗ハ権太坂と号し此地ハ武相の國界あり

坂路の兩傍中を蒼松の老樹左右は森列と坂上あり

右と望めハ芙蓉の白峯玉をけりるるゆ左を顧むる

鎌倉の遠山翠黛濃中々実ハ此地の風光ま一奇觀

と稱す春日山日記は謙信鎌倉鶴岡社恭乃節

江田稻毛小机小杉権現山品野坂杯云海道筋あり

この岩を討敗とありハ此地あり中世小墨あり

時田城跡 新町より金澤通道時田村の内時田橋と

城山と号く封域東南ハ一町半計南北ハ二町餘あり

小丘なり郡ハ久良岐 往古吉良左兵衛佐義門此地に住す

と云ハ田原記ハ永祿十年武田信玄小田原を襲んと条下ハ王子筋へ信玄

神大寺と山と筋違あり

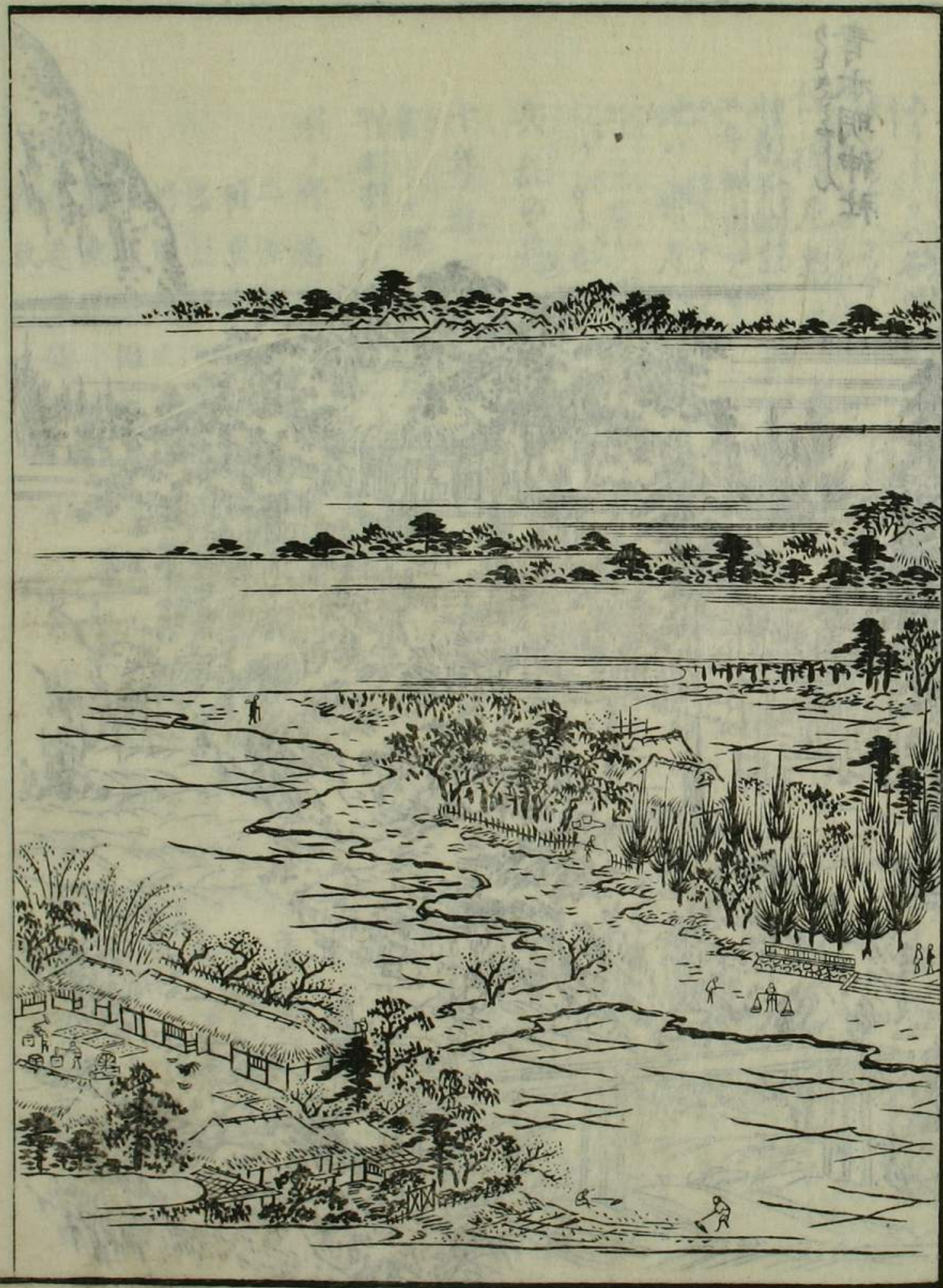
左兵衛佐居住なり左兵衛佐其項大橋守康忠北見關加賀守高頼杯相

具ハ小田原あり此吉良ハ北条氏康の妹聲あり妻ハ藤田あり折節

人敷ハ多目周防守と其項青木と我構を栗田藤巻

此建物の宅を焼せし生く命せんが部豊前守泰則より時田は

折云同心とを連れて時田と守護し



青木明神社



あり一々各吉良のやまきの敵ある山ふのりて鑿炮とあつけ候れハ敵と
米らしとあつて

二位 禪尼影堂 井戸ヶ谷村 乘蓮寺と云 西光山と号す古義真言
秘尊不動尊なり慶安二年始草とあり云 宗石川室生寺に居す

地ハ禪尼分領の地ゆゑニ公の生前自影堂 尼公の肖像ハ
等身なり四十計の繪中と建てる乘蓮寺と号せし其後度々
右の御念珠と持しありと

兵乱の為ニ破壊せしと秀善法印 勸進の功を慕り寛永
十年癸酉影堂と再興せしものハ梁牌 鎌倉志龜谷の壽
書し 梁あり二位尼 福寺ニ如實妙觀と

平政子の牌ありとのハ 銘ニ詳なき 其文左

梁 牌 銘 曰 二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 將 家 北 方

頼 家 實 朝 兩 公 為 慈 母 三 朝 公 法 名 如 實 世 人 号 尼
嘉 祿 乙 酉 年 七 月 十 三 日 卒 分 領 存 日 立 影 堂 号
將 軍 是 也 井 土 谷 卿 依 為 亂 破 滅 今 秀 善 法 印 廢 堂 号
乘 蓮 寺 雖 建 立 者 也 兵 乱 破 滅 今 秀 善 法 印 廢 堂 号
他 力 令 建 立 者 也 御 影 堂 一 宇 國 土 安 全 求 願 成
辨 依 立 鎌 倉 二 位 尼 御 影 堂 一 宇 國 土 安 全 求 願 成

寛永十癸酉年三月十一日

大檀那間宮産次郎忠次
別當 兼蓮寺 秀譽

東鑑脱漏曰嘉祿元年乙酉七月十一日庚午丑刻

二位家薨御六十九歳是前右大将軍之後室二代

将軍女儀也前漢之呂后而令執行天下給若又

神功皇后令再生令擁護我國皇基給敷云云

十二日辛未霽寅刻二位家御事有披露出家男女

併之云云
按當寺梁札の銘は二位禪尼逝去の日を嘉祿元年七月十三日と
東鑑脱漏七月十日とすを以て證とす

瑞應山弘明寺全澤通道より十四丁歩右の方へ入る弘明

寺村あり坂東順礼札所の第十四番目なり當寺は

弘法大師開創の佛刹ゆゑ中興を光慧阿闍梨と号

古義真言宗石川室生寺に属せり毎年七月十日十二月

十八日市立く大賑ハハシ
東鑑曰治養五年正月廿三日於武蔵國長尾寺
并求明寺等者以僧長榮可致沙汰之旨被定下是

源家累代祈願所也云云

本堂本尊十一面觀世音菩薩
佛龕背面銘曰中興光慧阿闍梨注長六尺の立像ニ

荒木作表本有横削横度十方立像堅救三世長六

尺約六丈十一面頭果地各行基示深旨也

天満宮
本堂の内右の股檀はあま昔浪華の旅客其菅神の像一軀を

携へ來りて懸と售むと欲されしをいひて買人と云ふ云々

神と稱し中院前大臣通成公の御所葉唱善氏斯に此地あり此

神と稱し和野の人の大感應を以て因て神恩を謝す

神殿造營せしと云ふ

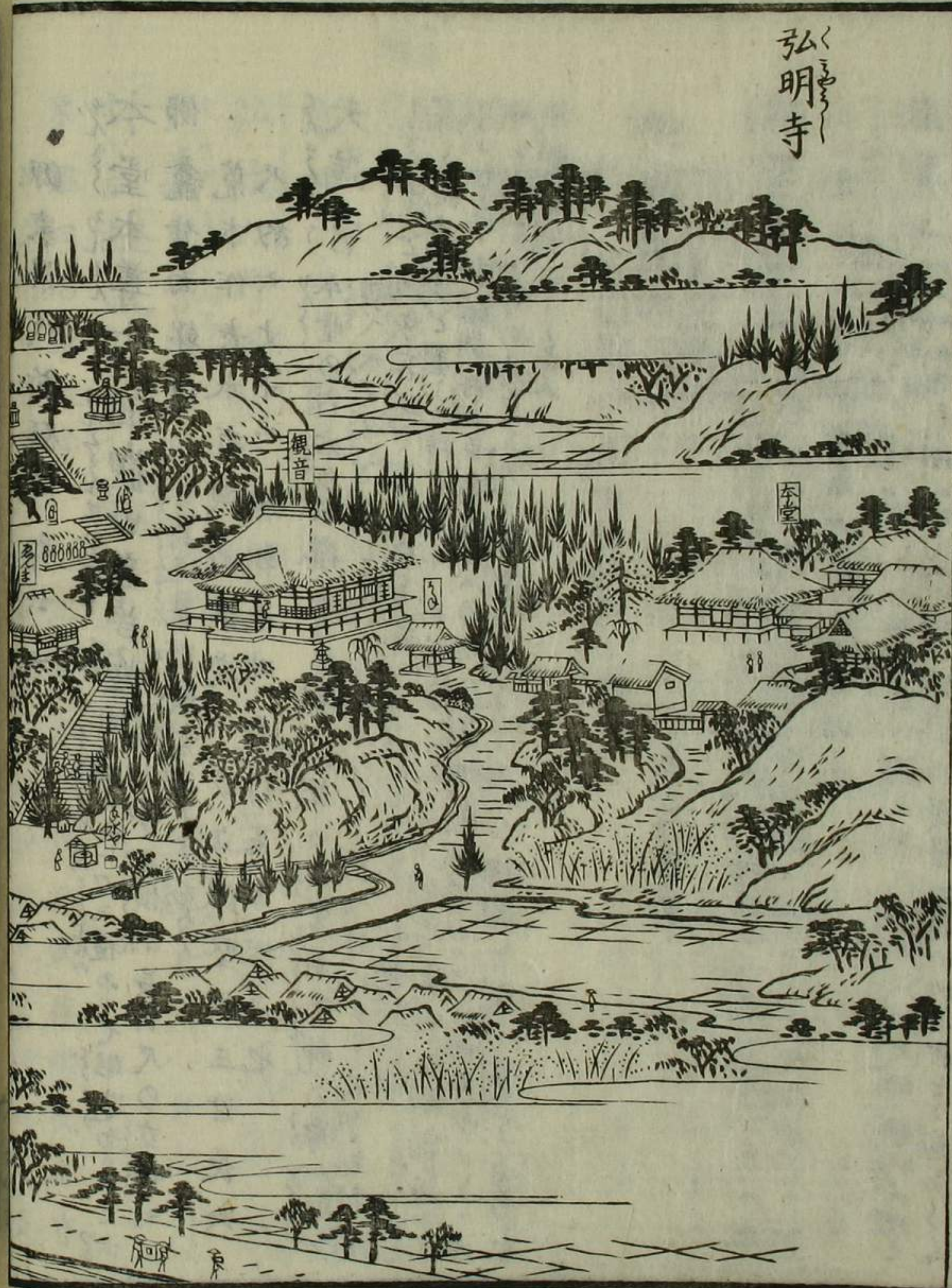


大角信勝筆

熊野權現祠
本堂の左の方此山はあま往古行基大士此地に至りて

鳥小乘と稱す熊野權現と稱す由縁起

麻耳山
熊野祠あり阿加井あり按よか縁起は弘法大師護摩壇の旧跡と稱す是れ



神明宮



鯨鐘

堂前右の方坂の土より、同鐘弘安九年九月廿五日鑄治のものにて願主
法印長慶とつゝ名を注せり、今の鐘ハ寛政十年ハ改鑄せり

七ツ石

神變奇異の靈石也、自ら現れ自没する人恒々其在所とあるはと云ふ
若堂舎破壞及及び修理のたをゆるる時ハ因らるる此石現れと云ふ

然、檀家の庭中より出たりとあり、寺僧喜ひ、當寺境内に安んず、尚靈石の徳
同郷檀家の庭中より出たりとあり、寺僧喜ひ、當寺境内に安んず、尚靈石の徳
具は靈驗集に記され、此石今二王門の傍にニツあり、又最戸村に於て地中より
存し、當寺表門の前耕田の中にも一ツあり、共々四ツハ今現然と云ふ、其餘の所在ハあるを
と云ふ

二王門

石階の下あり、金剛密迹の兩像ハ運慶の作なり、各九尺餘、その
石像の形、瑞應山と筆し、佐々木玄竜の畫なり

小田原北条家制札

永祿十年丁卯十月二日
石卷彦六郎とあり

同寺領寄附證文

天文二年癸巳二月十八日
石卷勘解由左衛門守とあり

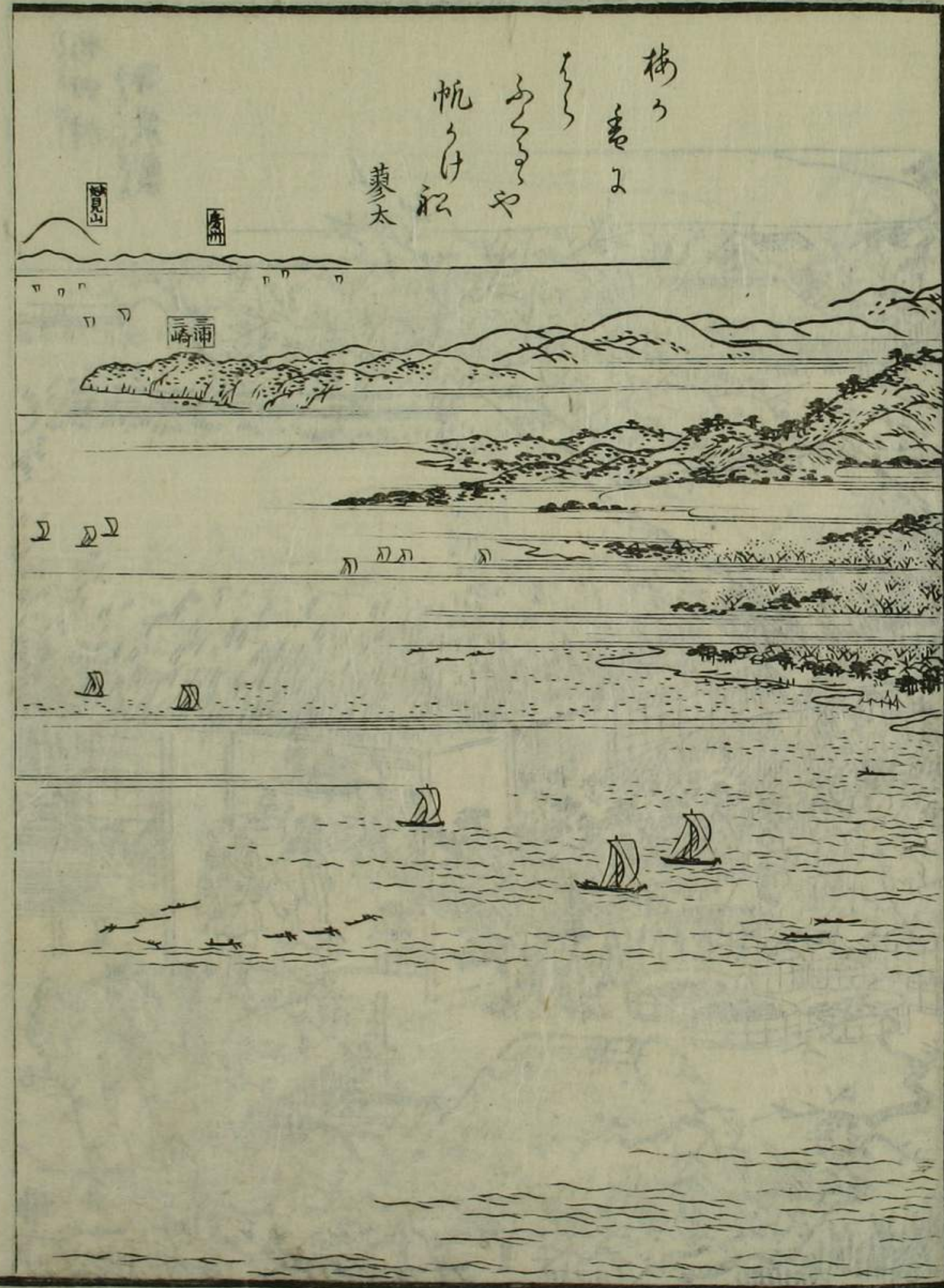
本尊縁起曰人皇四十五代聖武天皇の御宇行基大士東國

遊化の頃此地に至り、その空中小白蓮乱飛、山上一

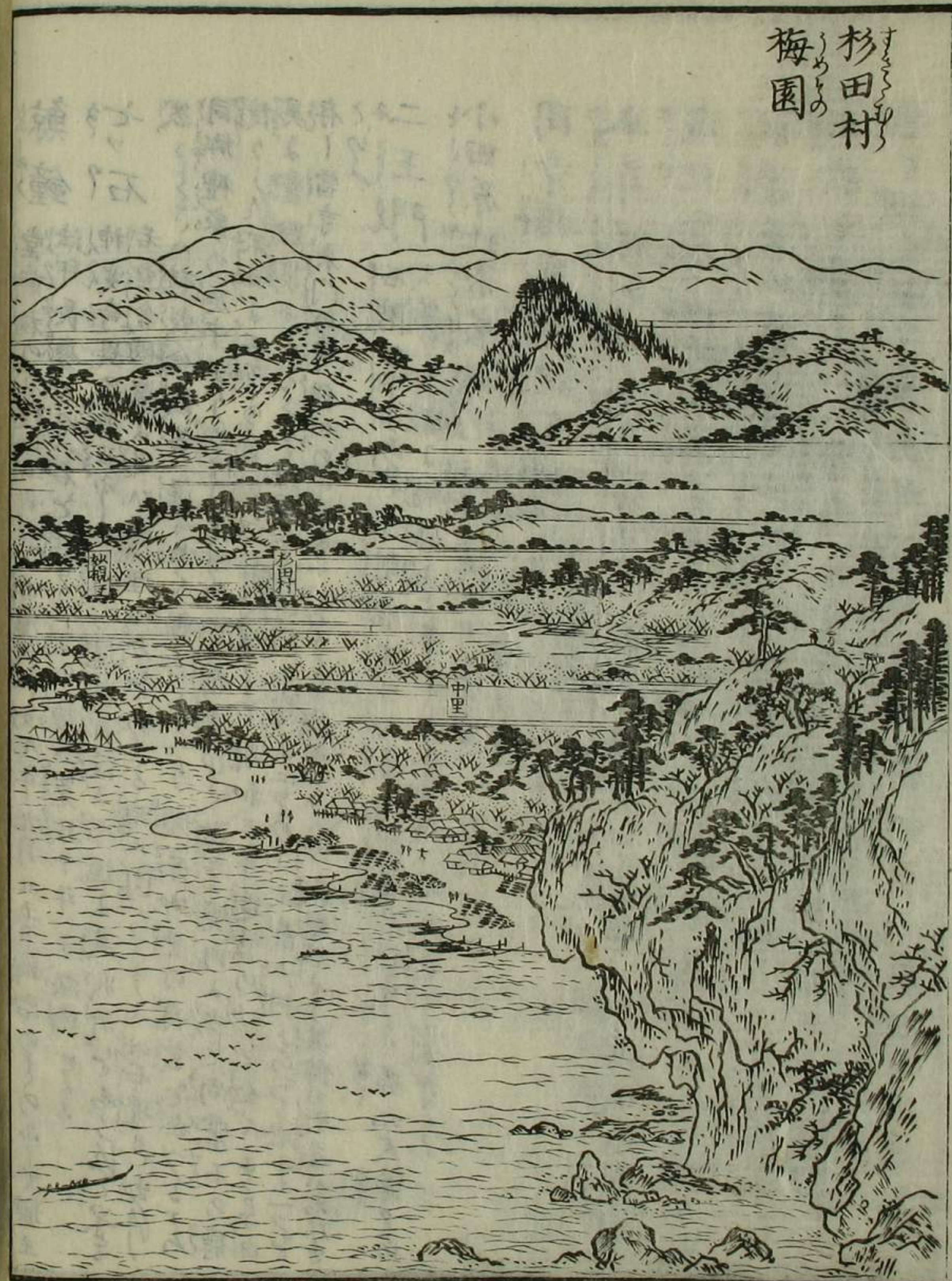
散墜、大士怪しく山に登り、その果てに神人のついでり、一を

白狐に乗し、一ハ靈鳥に乗せ、今境内に鎮座の熊野、各大士

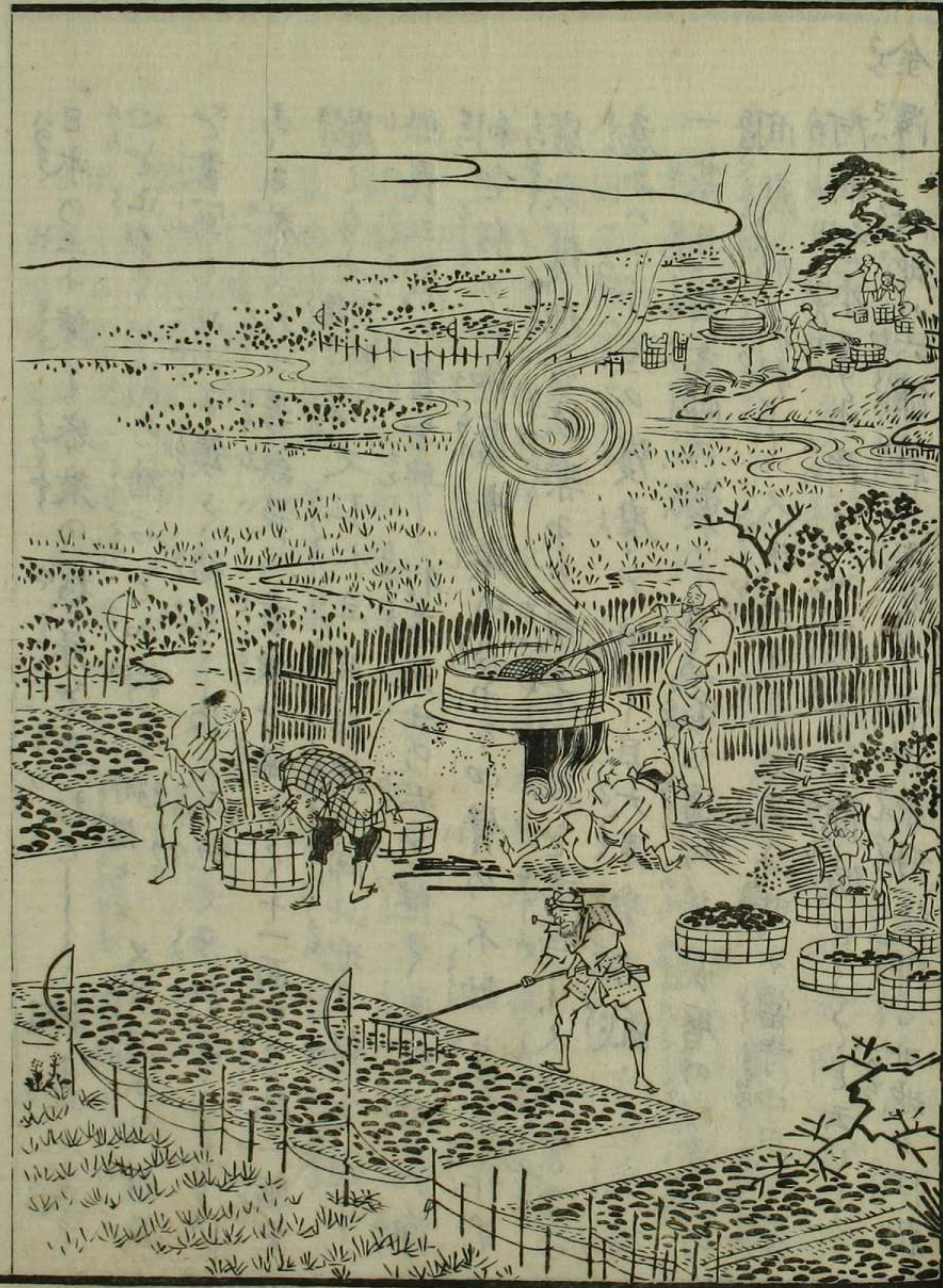
告て曰く去る養老年間、印度の善無畏三藏遠く我



梅う
 喜よ
 帆うけ
 江
 夢太



杉田村
 梅園



すきと
杉田村
あまこ
海鼠製



金澤

日本の土小渡を密教の機縁を要むと云々 終小此地未也
心と止り七箇の蟠石を加持し 又其石小陀羅尼
を書寫し此山は鎮く結界しぬと云託て其方と云々
あふ於く大士善無畏の素懐を鑑く十一面の尊像一軀を
彫り又弘仁年間弘法大師此地に錫を飛し
無畏三蔵の舊を興し行基大士の跡を継ぐ大悲者此淨
刹を初め伽藍安鎮の爲め四臂の不動尊を
密教護神の法樂を般若心經を書寫し人法繁榮の
爲め一千座の護摩を修し且大黒愛深此字の宝塔
一基是皆大師の製し多の道の後長曆の頃武相の
間疫癘流行し人民大患を患ふ時當寺中興光慧
阿闍梨本寺の所長此疫災を除滅せしと云々
此地ハ六浦莊の内なり吉田兼好法師も此地に住れ

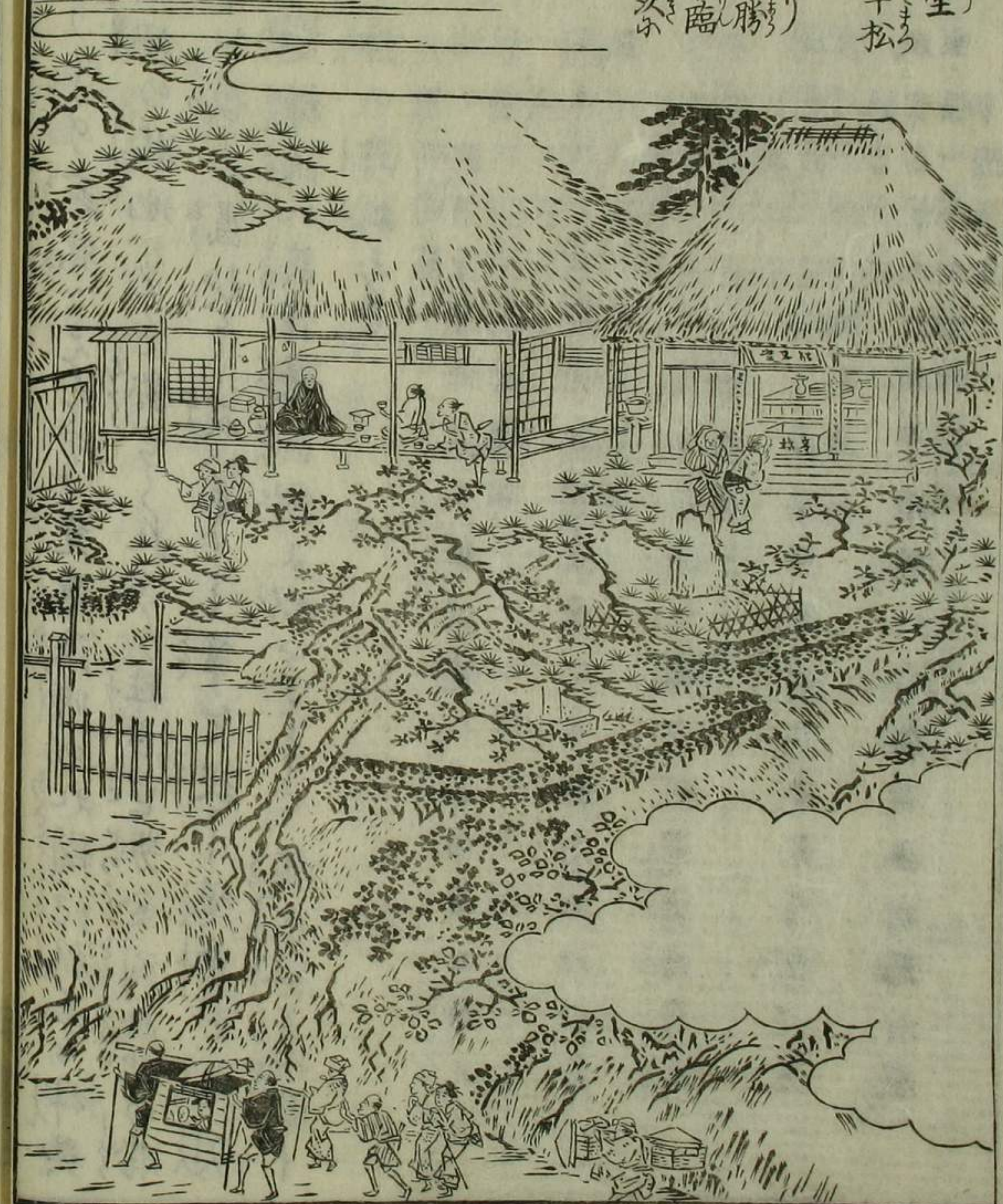
絶妙の勝地なりと稱せられし 往古巨勢金岡此地の勝
景を摸し畫むと及つて筆と投し嘆賞を大明
心越禪師ハ其佳景西湖に似しと云々 其八勝は淮疑し
八詠の詩賦あり

洲崎晴嵐 瀨戸秋月 清瀨消々 飄處共看 暮雨淒涼 相識歸帆 朝宗萬派 雲外依稀 風青稱名 生風一落 雁迷離木
餘暉滾々 狂波遠竹 扉市後日 斜人
自依依 依
傳 屈 籟 正 中 秋 廣 寒 桂 子 香
亦 驚 甘 泉 洞 々 聽 分 明 蓬 窓 淹 蹇 無
鐵 笛 聲
天 無 恙 輕 帆 掛 日 邊 款 乃 高 歌 落
洲 前
離 祇 樹 木 晚 扣 若 鱗 音 幽 明 聞 者 咸

涼
 やさ
 け
 と
 星
 筆
 擲
 松
 西山
 宗固



能見堂
 擲筆松
 此所より
 金澤の勝
 景を平臨
 する
 園は
 大
 なる





金澤勝樂
一覽之圖

能見堂
平臨
所の
あり

能見堂

金澤稱名寺の良の山上より禪宗の草庵あり

本寺の地蔵井ハ惠心僧都の作也一寸八分有りと云
後世立像二尺五寸計の地蔵菩薩を作し靈像をハ

其胎中より云故に草庵を地蔵院と号く
近世久世和州侯源廣之建立あり
能見堂の額の額を共心越禪師の書なり
相傳の昔畫工

巨勢金岡なるもの其真景を写さんと筆は及ハさる

列陣冲冥堪入塞荻蘆蕭瑟幾成隊飛鳴宿食恁

樓進千里傳書誰不愛

廣内川暮雪沒奇花六出以鋪練渾然王砌山

河色遍覆危峯露些尖

獨羨漁翁是作家持竿盪漿日西斜網得魚來沾

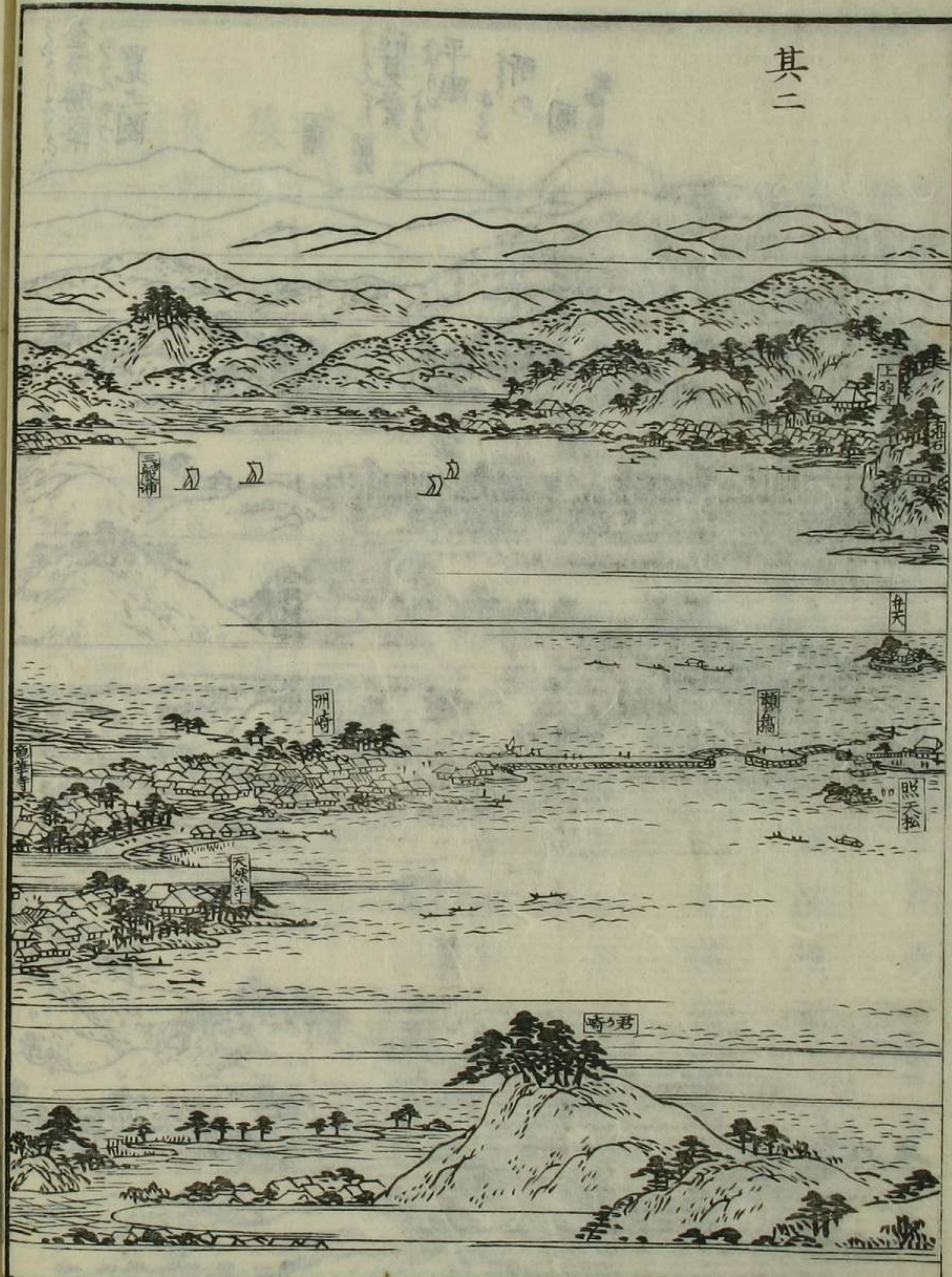
酒飲披蓑高臥仕堪詩

武州金澤擲筆山能見堂有蒲相八景之風味因觀

鎌倉志甚詳一夕寥寥對青燈漫賦八景之陋句以

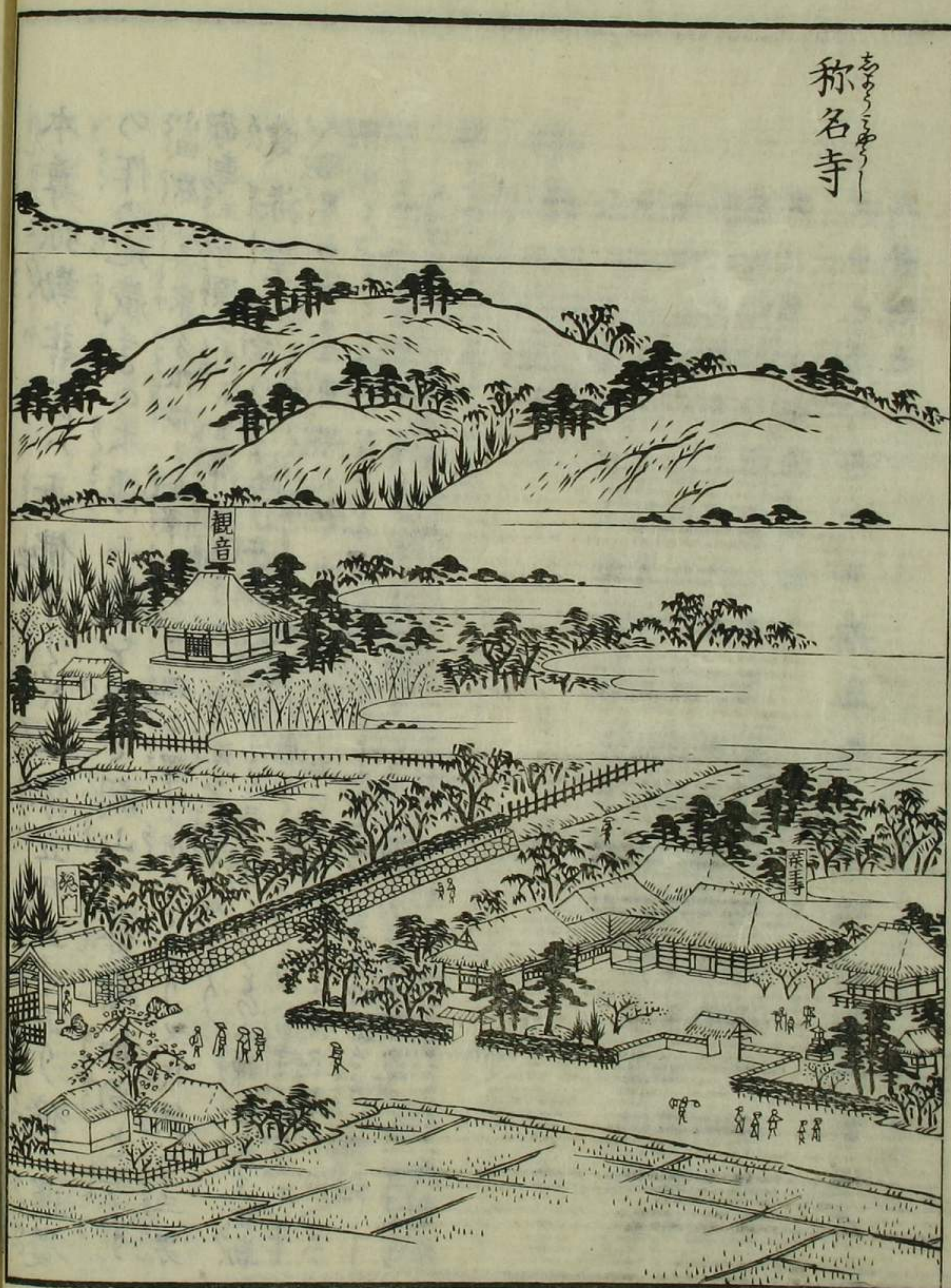
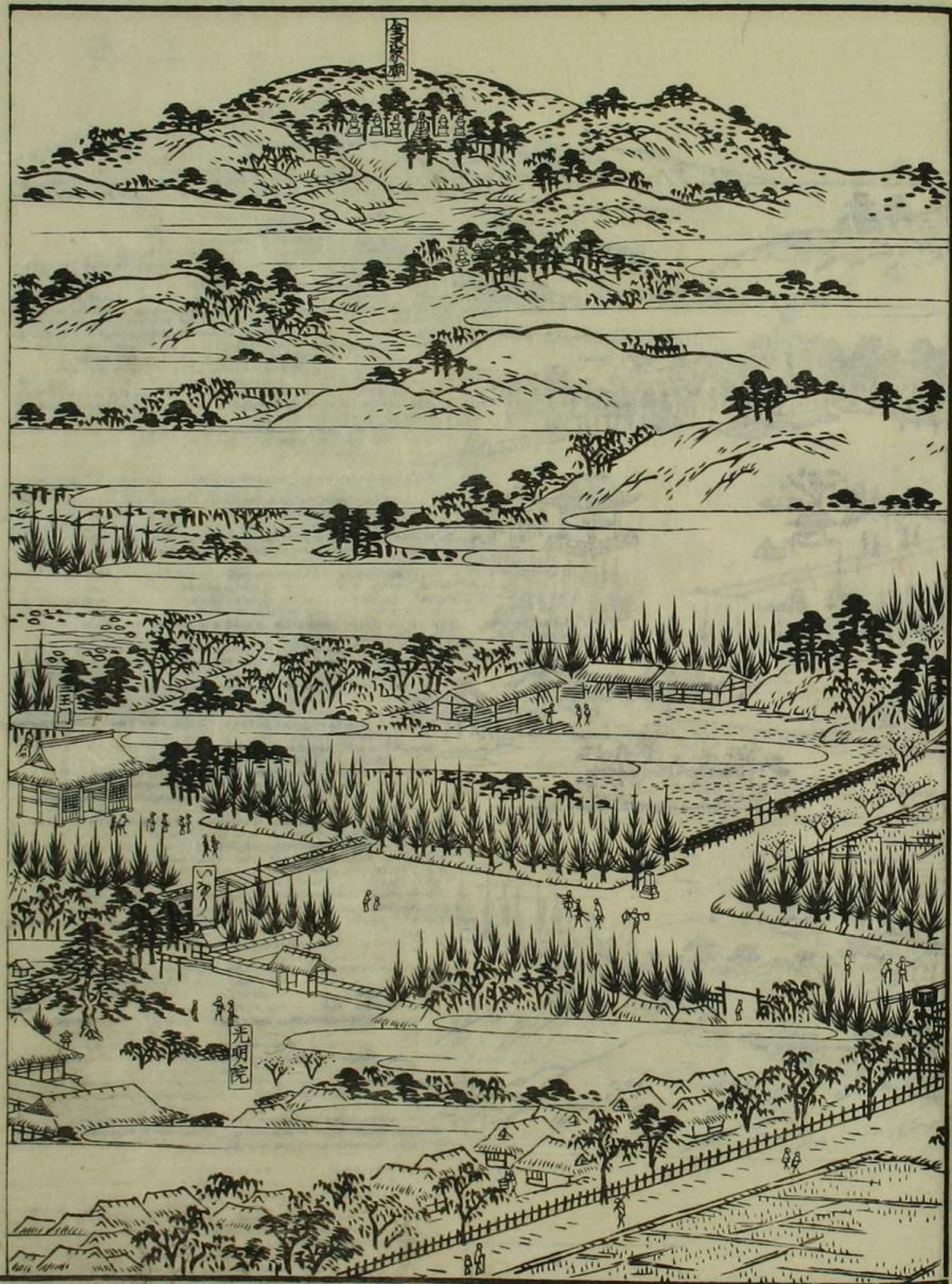
識斯勝境云歲執徐夏日

東阜越杜多艸



北よめりりくハ皆山や〜東ハ滄溟に連り千里の風光
 窮りなく沖舟の真帆片帆ハ雲小入りとあや〜海
 瀬戸の神祠ハ水は臨み、稱名の佛閣ハ山ハ傍り漁家
 氏屋ハ樹間〜く〜島嶼ハ波間〜にあ
 り〜又、瀬戸の烟潮水の盈虚も皆此擲筆松の下に平臨
 せ〜水や〜一瞬は遷り一日早晩の異なる一年春夏
 秋冬の変わりも千態万状極りなく、潮左の一勝地あり〜
 あり〜松島象潟の風致あり〜を以雅客遊人留連時と
 移せ〜り〜其十〜一を究り能〜を
 金澤山稱名寺 町屋村にあり 弥勒院と号に真言律に〜
 南都の西大寺は属を當寺ハ龜山帝の勅願所あり〜
 北条越後守平實時の本願其子頭時の建立なり 實時と
 号又法名を正慧と稱し此地は居住せ〜頭時より金澤を家号とす頭時
 法名を慧日と号を靈牌ハ弘安三年三月二十八日に卒せ〜あり

本尊弥勒菩薩ハ唐佛あり〜立像五尺五寸あり傍に運慶
 の作の地藏菩薩の本像二軀を安を関山ハ審海和尚と号す
 小田原北条家分限帳に金澤稱名寺頭金澤伏せ〜あり又氏綱の三男
 兼壽王所領の内は金澤稱名寺分とあり地を注〜加〜
 愛染堂 本堂の西にあり本堂一切を道興准后の回國雜記に稱名寺とす
 大結界の圖は三重塔と注〜道興准后の回國雜記に稱名寺とす
 律院とす〜の外の外なる古寺あり〜蓋あり〜此塔の所ハ順礼
 へ〜又澤庵和尚の鎌倉記行あり本堂一字あり諸堂皆跡を〜り五重此
 塔も一重なり〜あり
 鐘樓 本堂の東にあり
 其銘云く
 大日本國武州六浦莊稱名寺鐘銘
 降伏魔力怨除結盡無餘露地擊捷提菩薩聞當集
 諸欲聞法入度流生死滅聞此妙響音盡當切衆生
 諸行無常是生滅法無有衰易一聽鐘聲當願衆生
 悉有佛性如來證菩提無有衰易一聽鐘聲當願衆生
 斷三界苦願證菩提無有衰易一聽鐘聲當願衆生
 文永己巳仲冬七日奉爲先考先妣結縁人等同成
 正覺鑄之





其二



金澤頭時墓



金澤貞頭墓

大檀那越後守平朝臣實時實泰谷禪尼

宋入宋小比丘 慈圓種述 洪書

改鑄鐘銘并序 此鐘成乎永 力并募士女 伏乞先考超 於光世音暨 洪鐘之起其 質備九乳形 三朝之夕趣 之朝之夕趣 正安辛丑仲 大檀那越後 法名慧日當 大和權守物 部國光山 城推守同 依光

大檀那越後守平朝臣實時 法名慧日當寺住持沙門審海行事比丘源阿大工

金澤頭時墓 同貞頭墓 當寺大檀那阿彌陀院後の山の中腹あり 高七尺餘の五輪の石塔あり 高きも前不同程あり

美女石 蛇石 とてとよ池の中搦より西はあり 金澤
 青葉楓樹 金澤の八木と称するものあり 謙母 今本を裁り

北國記行 金澤のりく称するものあり 謙母のあり

つゝあはれは一本此の時自らむのふさささるるるのむらめ

東國記行

秋もいつとまきよふむを乃 宗牧

鎌倉記行

西湖梅 鐘樓の殿あり 澤庵

梅

花無盡藏曰 西金湖梅詩序 萬里居士
 丙午春 入西金湖梅詩序 萬里居士
 為遺恨 則本邦之山 而斯東支那之觀也
 唯見苔蓋先代好未見 其花豈非南遊第一奇觀乎
 哉金澤招提名遊之庭 背西主屬余作詩 云前朝金
 澤古翠禽啼及今年 餘雖未盡福山西有湖 識面枝
 遺恨翠禽啼及今年 餘雖未盡福山西有湖 識面枝
 春猶其花數十片 餘雖未盡福山西有湖 識面枝
 舊廬奉獻而彼見 包於春 梅翁已酉 借余則趙昌
 條貼其花 近於春 翁已酉 借余則趙昌
 所并出 於春 翁已酉 借余則趙昌
 觀焉 次要作 於春 翁已酉 借余則趙昌

六浦秘法日荷上人
 称名寺の住僧と
 蔵小基と園と彼
 寺の二王と
 賭物と
 上人勝
 くれ、終ふ
 これを負て
 甲州身延
 山へ至られ
 たりと云
 大力無双の人
 たり



前朝金澤古招提
 梅有西湖指枝拜
 遊十年遲雖啞臍
 未開遺恨翠禽啼
 一横枝上粘西湖
 名字斯花別不呼
 意外春風真假合
 傍人定道昼成圖

櫻梅 同所あり花ハ重瓣 普賢象 本堂の前左の腰あり一品に
 文珠櫻 同所あり普賢象の對一の 一室 鐘樓の後あり門に一の
 今ハ荒廢せり澤庵和尚の鎌倉記にありの室との書せし額を揚く
 声のともをとり坐禪觀法の床をあらわすも似たりとありく寛永永乃
 頃も荒

阿弥陀院 本堂より左山の傍あり 二王門 樓門の左右に安置せる
 運慶の作あり此二像ハ杉田村東禪寺とのありそよ近きなり當寺
 旧の二王像ハ六浦の荒井平次郎光吉出家終小日荷上人勝より上人或日
 称名寺の住僧と基を圍二王を賭とを六浦上行寺より其二王の像の玉眼
 二王の像をゆき身延山に送されたりと云六浦上行寺より其二王の像の玉眼
 なりと称する五寸ありの玉と傳へり

熊野新宮 此の西岡の鎮守あり
 寺寶佛舍利 祖相兼の舍利と号しと代々弘法大師大和
 國室生山に納置ありと 龜山帝の勅にあり

當寺へ後納り納り昔ハ彌勒佛泥塑像
長三寸座像ハ一七
弘法大師の作あり
愛深明王金銅像
龜山帝の御念持佛
請雨經瑜伽論
共ニ管丞相の真跡の瑜伽論ハ長二寸五分一行ハ二十五字あり此論ハ一部百卷
紀州高野の金剛三昧院ハ一巻江州竹生島ハ一巻以上合せ八巻ハ今尚存
枚舉も違あり

大界外相圖
元亨三年當寺結界の図なり其光景尤大廈高堂ハ
今ハ異なり其裏書の擬云

元亨三年癸亥二月廿四日
羯摩師極樂寺長老忍公大德
答法多宝寺長老俊海律師

當寺本願越後守實時及ひ顯時貞時貞將等の画像の
懸幅あり

揚貴妃玉簾一連
初尾州熱田あり
龜山帝の勅あり當寺ハ
梅花無盡藏曰
金澤林名律寺間
西湖梅以未開爲
遺恨矣珠簾猫兒支竺群書之目錄無介者而不能
融目云云
注曰称名寺水晶簾唐猫見之孫一大時教及郡書

盖先代貯焉
又曰寺秘件々之物容易元使人看之也

田園雜記
屋の長さ三尺四寸ひろさ四尺半あり水精の
かきかきせのみの屋あり
此のそのあり九花
中りたれハ古の感緒々々
道與
推后

北條陸奥守制札

金澤阿弥陀堂称名寺領敷地并垣場等事
右於當所軍勢并甲乙人等不の致咎妨狼藉若於
令遠在軍者為被處罪科之被注申交名々状依仰
執達如件

康安二年五月廿四日
陸奥守 印
永享十一年称名寺領結解状

註進

稱名寺領赤岩十四ヶ村御年貢錢永寛結解状事

合八十貫文内

六十九貫六百分

八貫文

一貫文

八百分

三百分

三百分

己上八十貫文

右所勘定状如件

永享十一年三月三日

政所憲意判

當寺北条家繁昌の昔魏の巨藍なり物換り
星移り堂宇多く破壊し今ハ山圍と古木聳松杉

梢をありし常小鬱あり房宇もありし寂寞の
扉を閉ち座禪觀法の床をありしに似し

金澤文庫舊址阿弥陀院の後の島と東野文集は寺前の
冒と相傳北條越後守平顯時營建もありし内に

和漢の羣書を納め儒書を墨印佛書ハ朱印を用
印文ハ楷字を一一豎ニ金澤文庫の四字を注す印章の

其後ハ荒廢し書籍散失せりとありし時再興せりとありし
清原の教隆ハ群書治要を續せりとありし平辰頼朝此所後守

其外人家ハ不ありし一部とありし東見記云金澤文庫内ハ左傳の卷本三十卷
中原師光ハ跋ありとあり鎌倉志ハ一切経の切殘りとありの弥勒堂ハありと云

印面大サ
共如レ圖

金澤文庫



鎌倉大草紙云武州金澤の學校ハ北条九代の繁昌此
昔學問あり一曰跡つらき是れ今度彼文庫を再建
し種々書籍を入置又上州ハ上杉々分國ありこれハ
足利ハ京并鎌倉ハ名字の地あり他ハ異なりや彼
足利の學校を建立し種々の文書を異國より求め
納る此足利の學校ハ上代兼和六年ハ小野篁上野
の國司より一時建立の所同九年篁陸奥守ありて
下向の時此ハ學校を建てる由其跡より今残る
るを應仁元年長尾景久ハ沙汰とて政所より
今の所へ移る建立し近代の岡山ハ快元とて禪
僧なり今度安房守公方ハ名字掛の地あれハとて
學領を寄進し彌書籍を納め生徒を隣縣をよめ
此項ハ諸國大にても學道絶たりハ此所日本

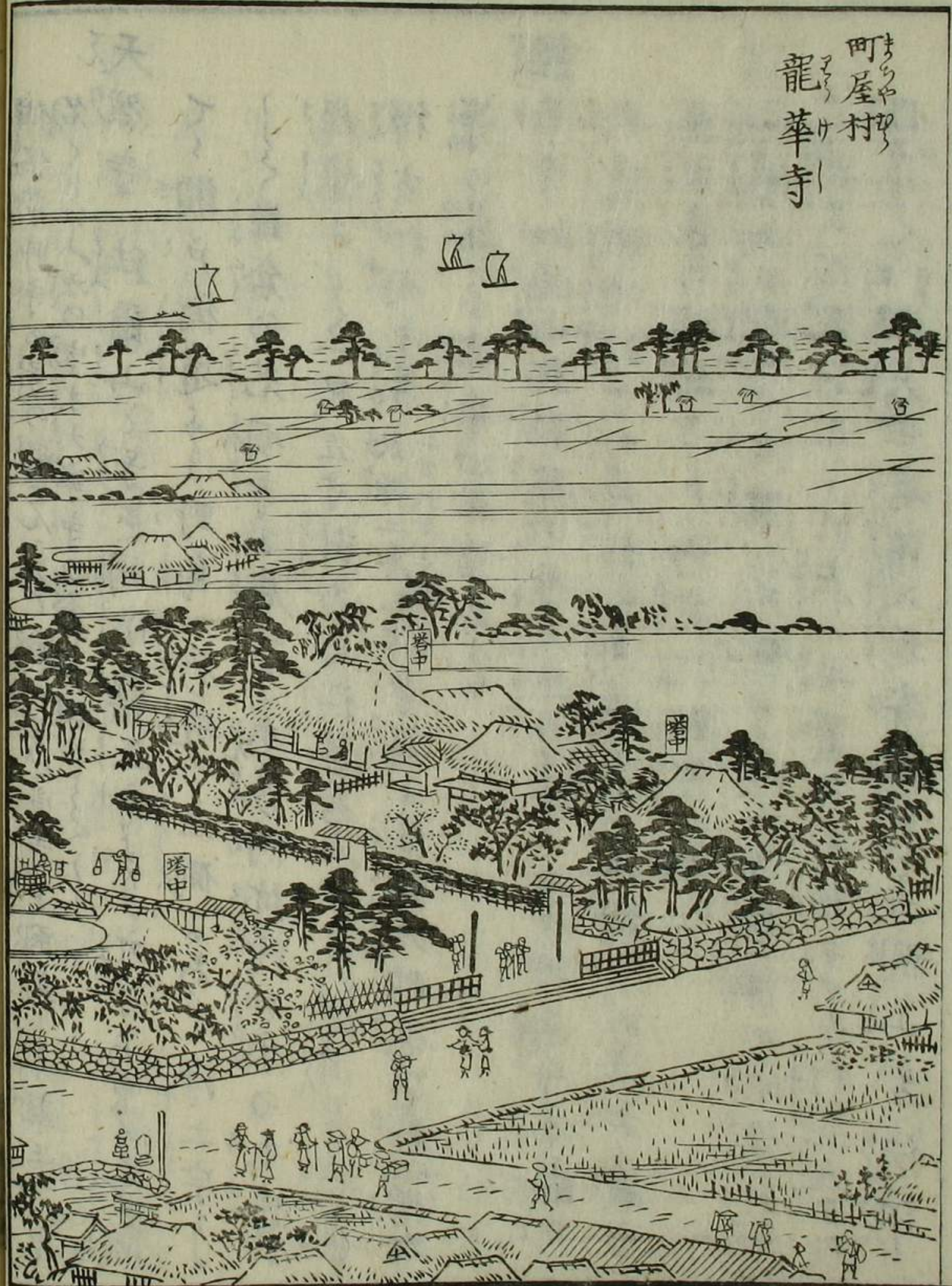
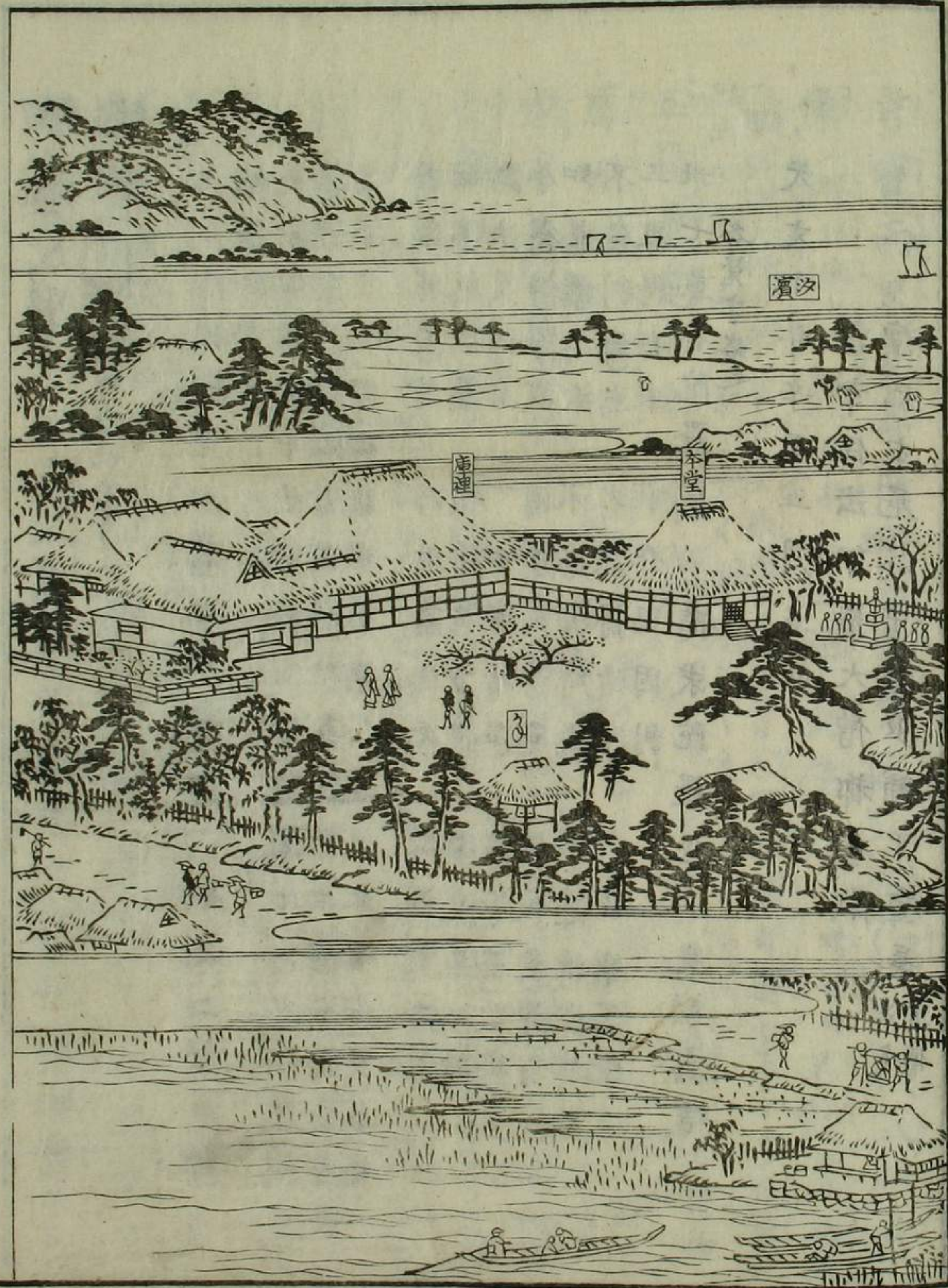
一所の學校とある是より猶以て上杉安房守憲実と
諸國の人をほめたるハ西國北國よりも生徒悉く
集ると云々

觀金澤藏書而作
遺人來義堂
經侯三晴走蠹魚
收在胸中歷五車

二月新築金澤の文庫
日向子勝元の許よりやそれと隣家梅花
といふ珍を供しとて遺しとて

表あれを移るといふ此を記すとも引の梅の月也 持資

丙辰記行
懷古淚痕羈旅情
人亡書泯幾回歲
府儒早晚起蒼生
境致空留金澤名
御所ハ谷阿弥陀院の後の切通と出る島と云里俗云々
龜山帝の行宮の跡なりと
切通ハ則所恭詣の鎌倉志り



融^と辨^{べん}と号^{ごう}
鐘樓^{しょうろう}其^{その}文^{ぶん}左^{ひだり}の^{ところ}に^{あり}

大日本國武州六浦庄金澤郷 知足山龍華寺

唱鐘知識文 夫滄海者鱗甲所潛泰岳者翔蹄所集則知智訖若

留塵所浴靈鐘者亦歎灰河脫三界苦得見菩提

善薩勝慧者 乃至盡生死 恆作衆生利

而不及諸槃 一般及方便 智度悉加持

諸法及諸有 一頂及清淨 調伏盡諸有

如蓮體本染 不爲垢所染 諸慾性亦然

不染利群生 大欲得清淨 大安樂富饒

三尊聰陀羅 能作堅固利 羅尼 光明真言

卅七尊略之

天文十年辛丑五月五日

當寺住法印權大僧都善融
檀那古尾谷中務少輔平重長
道法名傳

寺寶兩界曼荼羅 淫繁像 華者詳ありとあり 八祖畫像

像 一幅弘法大師の筆云々 十三佛補像 一幅中將姫の不動畫像

五指量愛深明王像 弘法大師の作と云 鈴一箇弘法大師の持物

鳳凰頭 龍頭 十箇共運慶の作の灌頂の時幡を掛る具あり

當寺ハ治養年間鎌倉右府頼朝公伊豆國三島明神と

金澤瀬戸の地小勸請ありあひ後法味を進むる爲

文覚上人と共に志を合せ文治年間六連の山中に精舎を

創建せし彌勒菩薩の像を安んず都卒の四十九院に

準擬し四方に六八の僧坊を建浄願寺と号庄園若干

と寄らる 當寺提たり往古弘法大師獲摩修りたり

覺を並へ粉壁八月の光を移せ伽藍ハ博敞あり丹柱あり

星の林をなせり 其後正嘉年間南都の恩性律師當山小

住し戒律を弘め弘長二年中を東寺の能禪法印當寺に
於く灌頂を修めせしむる印融僧都の附屬小依て光德寺に
兼帶せしむる此寺も頼朝公の建立の初此寺は住親筆の書籍也高野山
充滿然る教度の兵乱より西院の領地も他も奪はれ大に
荒廢せしを明應八年融辨師大永四年甲申八月深く是を愁へ
本尊の冥助を願われし菅原朝臣中務丞資方と合せ
伽藍再興を企むる時小本多弥勤大士夢中辨師に告
ぐはく是より良ま當く末世有縁の勝區あり彼所へ移
し三密の法燈を挑へしと夢覺く後其を窺はるる竜
燈の奇瑞あり洲崎村の境なりわが堂前は教圍の竟は辨師
本尊の靈尔に任せ此地に至る二町四方は結界し兼帶
せし所の淨願寺光德寺兩院の僧坊を合せ一寺とす
後土御門院の勅を奉り知足山龍華寺と号師資相

傳の本も聖教を納め善融法印は附屬を此師は相州小田
未子ゆ龍玉丸と号く辨師の徳を慕ひ淨願寺は僧とあり其營
世は隠れなり依り北条左京大夫永樂錢七貫文并柴村權現堂山を寄附
享祿五年小東寺の寶菩提院亮惠僧正を請りて傳法
灌頂を受天文十二年古尾谷中務少輔平重長を檀越と
し洪鐘を改鑄せし後太田道灌不動尊の靈像を寄
附し武運延長を祈り此不動尊の像は靈牌を置來世の
追福を求るる天正十九年御開國の後當寺を御修
營りし御朱印を下ししより四海泰平此祈念
意まごころ
當寺ハ真言古義檀林一宗の本寺ゆ金澤小甲より
境内中を古木聳え覺樹の粧ひを示し緑竹翠の色を
なす實相不變の容を頭も海水左右に湛く朝鳥夕鬼の
影を浮へ人家前後に列り山市漁村の觀をなせり二十

鎌倉記行

於夕下流

鳥帽子

名島

沖より

あき

ゆかり

澤庵和尚



浦の郷



有餘の末寺ハ林邑ニ散在シテ年々の法會月々の勸修
恒例ニ任せく怠るるなく實祚の長久武運の萬歲哉
祈りて暮る曉の振鈴の声ハ無明煩惱の眠を覺し夕比
梵鐘の印ききち三途の迷夢を破る實ニ江南の一精舎と
善應寺野島山と号し同所より半道斗を隔て南の
方野島ニ傍てあり真言古義の龍華寺ニ属す本尊
不動明王の像を作者をあるに正觀音の木像ハ立像二尺斗
ありて聖徳太子の作なり愛深明王ハ座像一尺五寸斗
ありて弘法大師の作と云此像の胎中ニ愛深菩薩の小像
千體を作して籠らるるなり
野島同所東の出崎ゆゑ瀨戸橋ハ八町間七八町あり土人
百軒島とも云民家百軒あり餘り時ハ必災ある所ハ百軒島と
呼ぶなり此所の出崎ニ紀州亞相頼宣卿の山の出崎ニ稻荷の
盛風呂の舊地ありと云
小祠あり又中腹ゆを管神の宮あり此地の北北を平方と

ついで町屋村の東を金澤原と云此地の東北海濱をこ
鞆の浦と稱せり

鎌倉記行 岩のありてふもひくく自ら齋をゆ
汀をいつくす秋の色はせあはるるれハ

野島渡一野島より南の方室木村へ入渡りゆ舟路
一町餘あり江戸より浦賀への近道なり

洲崎野島の西瀨戸橋の東北漁村を云鎌倉志ニ云太平
記及び鎌倉年中行事等の書ニ洲崎とあるを鎌倉山
内の西にある洲崎村のゆり中々此地ありて見え

瀨戸或ハ迫門洲崎と引越村との間をのみ
四國雜記瀨戸を海とつる傍地のまへを記す



旅亭
東屋



其二



瀬戸の沖は海ありて深くを

よきかたのたしむれば波もたれ瀬戸の浪は波はあ人

道真 推后

瀬戸の沖は海ありて深くを

よきかたのたしむれば波もたれ瀬戸の浪は波はあ人

瀬戸橋 同一入江に架せ中間に臺を儲け橋杭を用ひし

し長と二間あり此橋二川を渡し

迫門の明神とて入海にさし出たる山あり古本黒と麓に橋あり橋の下あり

照天姫松 同所北の方西の出崎にあり延寶庚申の大風小

吹折らるるより一株の松の根株のを存せり里彦より

云く照天姫姫の爲に燻られしとて姥う焼さし一の松とを

りつとを

鎌倉大草紙云 應永三十年癸卯春以より常陸國住人

小栗孫五郎平満重と云者あり謀反を起し鎌倉小

背さるれば源持氏結城の城へ勅座ありて同八月

二日より小栗を攻らる終に小栗忍びて三州へ落ゆる

とある条下は云今度小栗忍びて三州へ落ゆる其子

小次郎初とて小忍びて關東にありて相州推現堂

と云ふにゆゑを其邊の強盜を集りてに宿城

かりしれハ主の中ハ此浪人を常州有徳仁の福者の由

聞く定て隨身の寶ありて打殺しとて取らるる由

終合を乍去健なる家人ありて何せん云一人此

盜賊中を酒に毒を入吞せ殺せしとて先と同一宿城

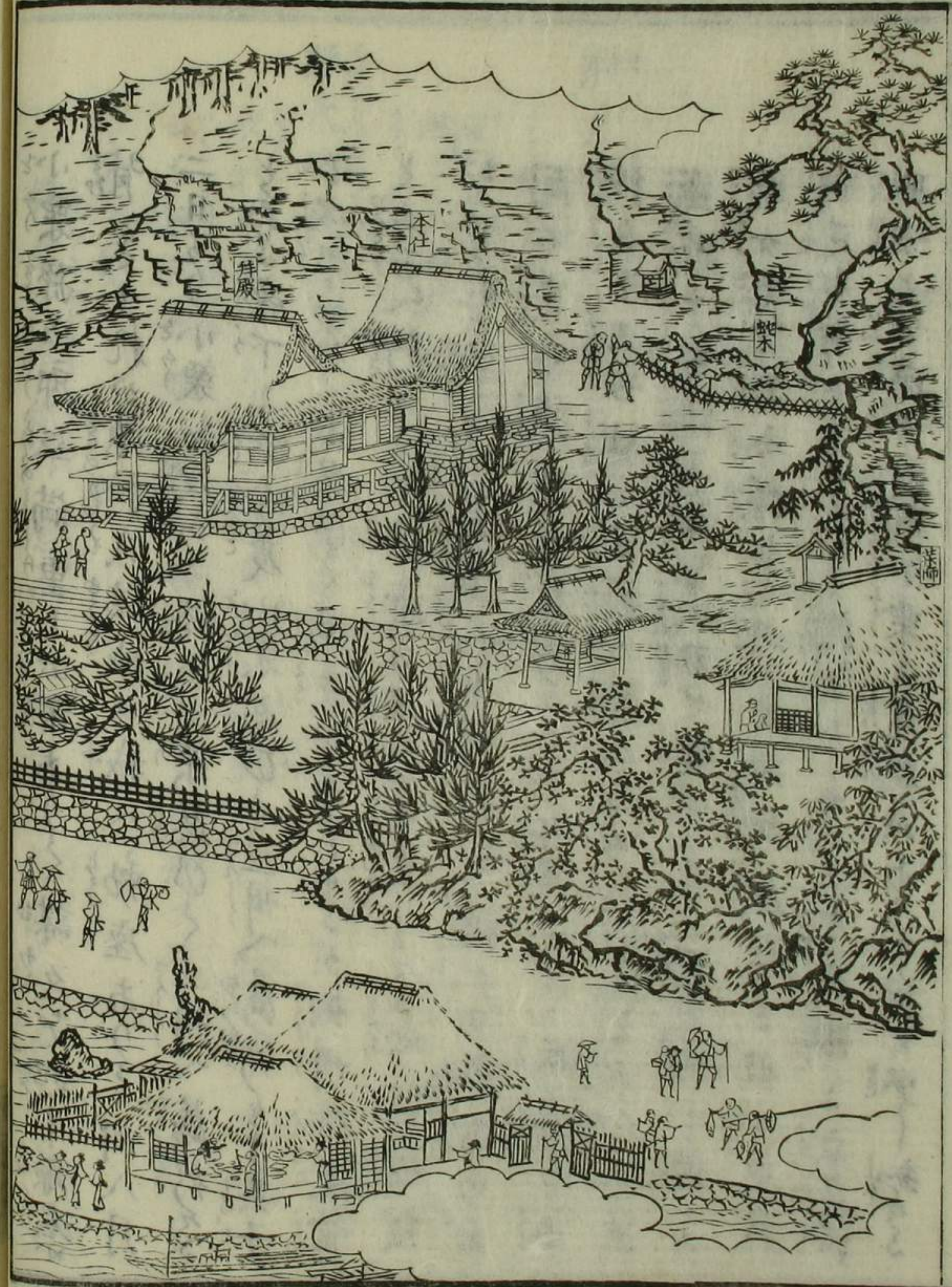
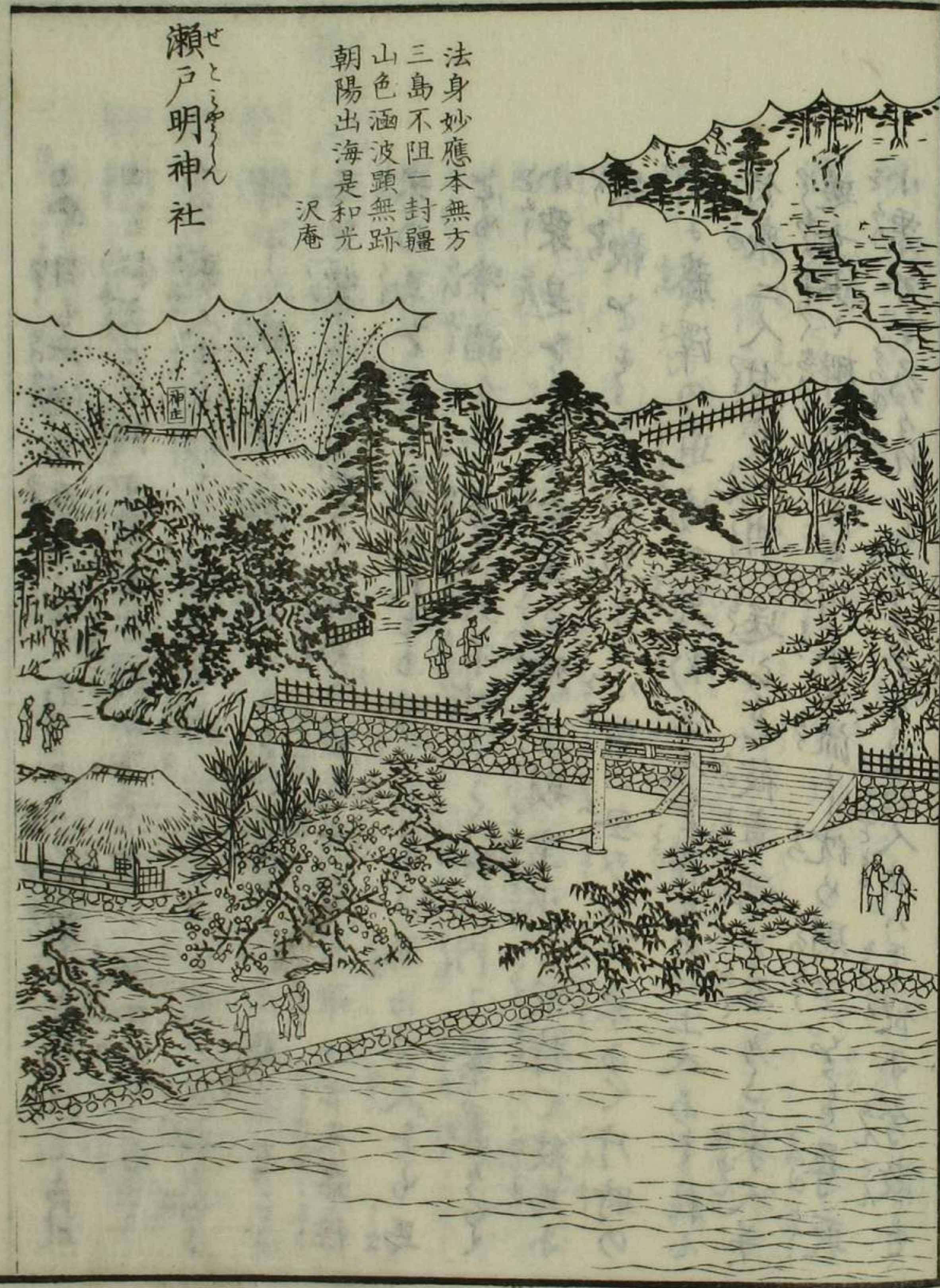
遊女をを集今様を唄ひせ踊舞戯れける彼小栗城

馳走の躰小栗とて酒を呑めける夜酌に立ちて

照姫と云遊女此間小栗に逢馴此ありとてを以て知る

瀬戸明神社

法身妙應本無方
三島不阻一封疆
山色涵波蹟無跡
朝陽出海是和光
沢庵



あや自らも此酒を呑ましくありたる小栗とあられとあれ
由を私言々間小栗も呑様ふとてか酒を更も呑さり
るる家人たを知ら何れも解伏てたり小栗ハ夜初もゆる
酔ゆく林の有る間へゆくは林の内小鹿毛かたふ
馬を繋ぎ置く此馬ハ盗人共海道中へ出大名往
来の馬を盗ま来れとも才一のある馬あくる人も馬
とも喰踏られ盗人共不叶しく林の内繋置き
小栗是を聞き密に立帰て財宝少く取持て彼馬ハ
乗鞭とまゆめ後移りたる小栗ハ毎双の馬乗めて片時の
間藤澤の道場へ弛弛上人を頼られ上人あられと
侍衆二人付く三州へ送らる彼毒酒を呑る家人并
遊女少く解伏て川水へ流し沈め財宝をも尋取
小栗をも尋られともなる盗人共ハ夜分散る

酔小立る照姫ハ酔々酔小もて酔一卧されとも本より
酒を呑さりこれハ水も流れ移川下より上りたをり
る其後永亨の頃小栗三州より来ると彼遊女を尋
か種々の宝と与へ盗人共を尋皆誅罰しり

三州小代々居住とあり
鎌倉大草紙小あり考ゆる照天姫ハ照姫の母と云小栗の名を世り
照氏と稱されとも同書小次郎とのあり照氏と云をあるは鎌倉志小
栗小栗系譜を考ゆる孫五郎平満重子助重とありとも此小次郎
能あつんとあり大草紙にゆかりありとも尤燈とをく
今世に云はるる西ハばりより附倉の流を備りりあり

瀬戸明神社瀬戸橋より一町半西の方道より右側あり
祭神大山祇命一座へ神主千葉氏奉祀を社傳し云
當社ハ右大将頼朝公治承四年四月八日豆州三島の御神を
勧請なりゆみとあり鎌倉年中移事あり四月八日瀬戸
三島大明神臨時の祭礼とあり或云往古此神此地へ飛

来^き 至^き ありし^し 土人傳へ云今金竜院の庭中飛石と

按^あ 瀨朝卿^{せあさ} 御^ご 鑑^{かん} 倉^{くら} へ入^い りし^し 治^ち 義^ぎ 四年十月六日ありし^し 東鑑^{とうかん} 小^こ 鑑^{かん} 司^し 久^く 良^ら 岐^ぎ 郡^{ぐん} 此^{こゝ} 年^{ねん} 四月八豆州の配^{はい} 所^{しよ} 治^ち 義^ぎ 四年十月六日ありし^し 東鑑^{とうかん} 小^こ 鑑^{かん} 司^し 久^く 良^ら 岐^ぎ 郡 六^む 浦^{うら} 不^ふ 審^{しん} 少^{せう} 伏^{ふく} 神^{かみ} 主^{ぬし} 拘^く 小^こ 田^{でん} 原^{げん} 北^{きた} 条^{じょう} の 館^{くわん} 懐^{くわい} 六^む 浦^{うら} 社^{しゃ} 領^{りやう} 司^し 久^く 良^ら 岐^ぎ 郡 六^む 浦^{うら} 社^{しゃ} 領^{りやう} 司^し 久^く 良^ら 岐^ぎ 郡 近^{ちか} 世^よ 里^り 人^{にん} 舞^ま 飾^{しやく} を 加^か へし 依^よ る 古^こ 色^{しき} を 置^お けり

看^{かん} 督^{とく} 長^{ちやう} 像^{ざう} 世^せ 尊^{そん} 寺^じ 後^ご 二^に 位^い 經^{きやう} 尹^{いん} 卿^{けい} 筆^{ひつ}

正一位大 山積神宮

同額裏書曰 延慶四年辛亥四月廿六日戊辰書之 沙弥麻尹

鳥居額 瀬戸明神 神道長正二位卜部季兼卿筆

鐘樓 社前左右の方あり

瀬戸三島社鐘銘 洪鐘新製寄器海瑞電神振徳衆人結縁韻徹遠近 鑠體黃玄緇素益大村里聽鮮閑静動閑奏敬悲近 驟化世俗頌歌夜禪覺煩惑夢驚生死眠昏曉清響

劫々永傳 應安七年四月十五日奉鑄之

普川國師鑑倉 空戒寺の奉鑄也

檀那 沙弥 釋阿并十方四衆等 勸進 大工 大和権守國盛

藥師堂 本社右あり土人

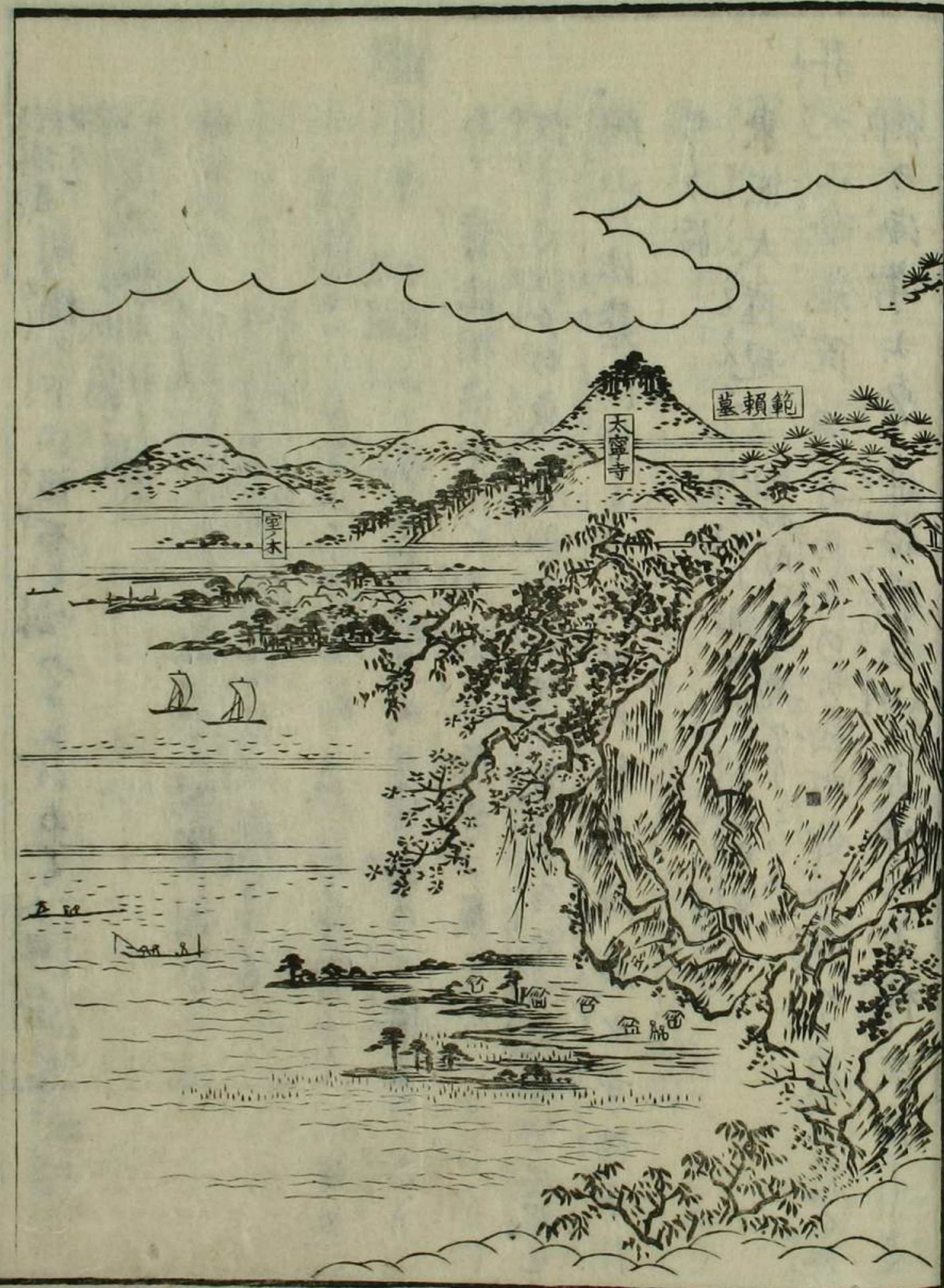
按^あ 下^げ 僧^{そう} 下^げ 野^の 國^{くに} 住^{すま} 人^{にん} 牧^{まき} 野^の 左^{ひだり} 邊^へ 何^{なに} 某^{かぎ} 子^こ 弟^{てい} 次^じ 郎^{らう} とし 父^{ちち} 左^{ひだり} 邊^へ 上^{かみ} 州^{しゆ} 伊^い 香^{かう} 保^ぼ の 湯^ゆ 浴^{よく} せし 頂^{たう} 相^{さう} 模^も 國^{くに} の 住^{すま} 人^{にん} 乃^{すなは} 祢^ね 禪^{ぜん} 正^{せい} 信^{しん} 俊^{しゆん} とし 此^{こゝ} 瀨^せ 戸^こ の 三^{さん} 島^{しま} 明^{めい} 神^{かみ} の 社^{しゃ} 前^{まへ} の 兄^{あに} 弟^{てい} の 輩^{はい} 親^{おや} の 仇^{あだ} と 報^{むか} ひぬ

三本杉 延寶堂のありし 根株相連りし三本ありし生せし

蛇混拍 本社右の傍あり 延寶八年庚申八月六日の暴風吹倒され

梅 花 無^な 盡^{じん} 蔵^{ざう} 曰^い 文^{ぶん} 明^{めい} 竜^{りゆう} 集^{しゆ} 丙^{へい} 午^ご 十^{じゆ} 有^あ り 八^{はち} 年^{ねん} 小^{せう} 春^{しゆん} 二^に 十^{じゆ}

同 瀬戸社 自注云六浦廟前有古柏屈蟠



奇なり 同橋の下に福石と唱ふるものあり 金澤四石と称す此石の
前奇なり 必有福の効とありと云々 一巾一土人の謗小此石の

鎌倉記行 社のありあまをいふ 社ありあまをいふ 社ありあまをいふ

浮菴 浮菴

圓通寺 日輪山と號せ同所二町半 西の方道あり 右

あり昔法相宗中々南都法隆寺に属せ今八天台宗に

改ま江戶の東叡山に属せり本寺を元三大師と安置せ

岡山ハ法慧法印と号久世大和彦源廣之寺領を附

せし侍 東照大権現宮

昇天山金龍院 同所西南の方四町餘を隔て同道の左

側の海岸あり世俗飛石山とも呼ぶを禪宗に

鎌倉の建長寺に属せり本寺正觀音座像二尺三寸行基

大士の作なり 鎌倉志小虚空藏菩薩と 方崖元圭和尚を以て

飛石 飛石 當寺後園の山に飛石あり高さ一丈あり廣さ九尺と云

九覽亭跡 九覽亭跡 同所あり曲折して登る所の備り亭の

泥牛庵 金龍院の前路を隔て向側あり禪宗あり

鎌倉圓覺寺に属す本寺ハ七寸計の唐佛の十一面觀音の

像を安置此庵の開祖ハ圓覺寺の傳宗庵南山和尚講

聖一國師の嗣法なり建武三年 中興ハ習甫玄道座原と号せ

十月七日寂崇壽寺の開山あり 中興ハ習甫玄道座原と号せ

當菴の南一町半山の上古墳二基あり其一ハ海老名

長門守と云ふ人の墓あり此人泥牛菴あり自害

終よりと云傍の... 時世事實の精一なりす

荒井妙法日荷上人加持水 同所農家金子氏の地は存す

井と云その味甘美ゆゑ尤靈泉と云此所の小地名を

荒井と稱せしむる往古日荷上人荒井平次郎光吉と号

能仁寺舊跡 今米倉の陣屋の地ありと云此寺ハ昔

鎌倉志古記曰 上杉房州太守築武州金澤能仁寺
創七宇伽藍請方崖和尚為開山第一世 諸山曰福
壽跡寺曰能仁太守有旨陞能仁寺位 列諸山者也
永徳三年小春日東暉曇所謹記又本尊建立永徳
二年三月七日始之 同暉曇四月廿一日終住持東暉
曇听奉行徳慧徳澤檀那巨喜上總州法眼朝榮作
之大檀那房州道合徳珠書之

能仁寺佛殿梁牌銘 鎌倉建長寺の龍峯庵

恭願皇圖鞏固而四海昇平 黎庶安寧而五穀豐稔
檀那前房州太守菩薩戒弟子道合敬白 在伏冀佛
永徳二年壬戌四月日開山方崖元圭謹題 右 盛昔

六浦山上行寺 泥牛庵より六七町西南の方道より右側に

あり當寺往古ハ真言の古刹ゆゑ六浦山金全寺と号

然る小應安年中此住持某日蓮の法を以て日蓮宗とあり

北徳中山の日祐上人開祖と云自ら妙法日荷上人と号

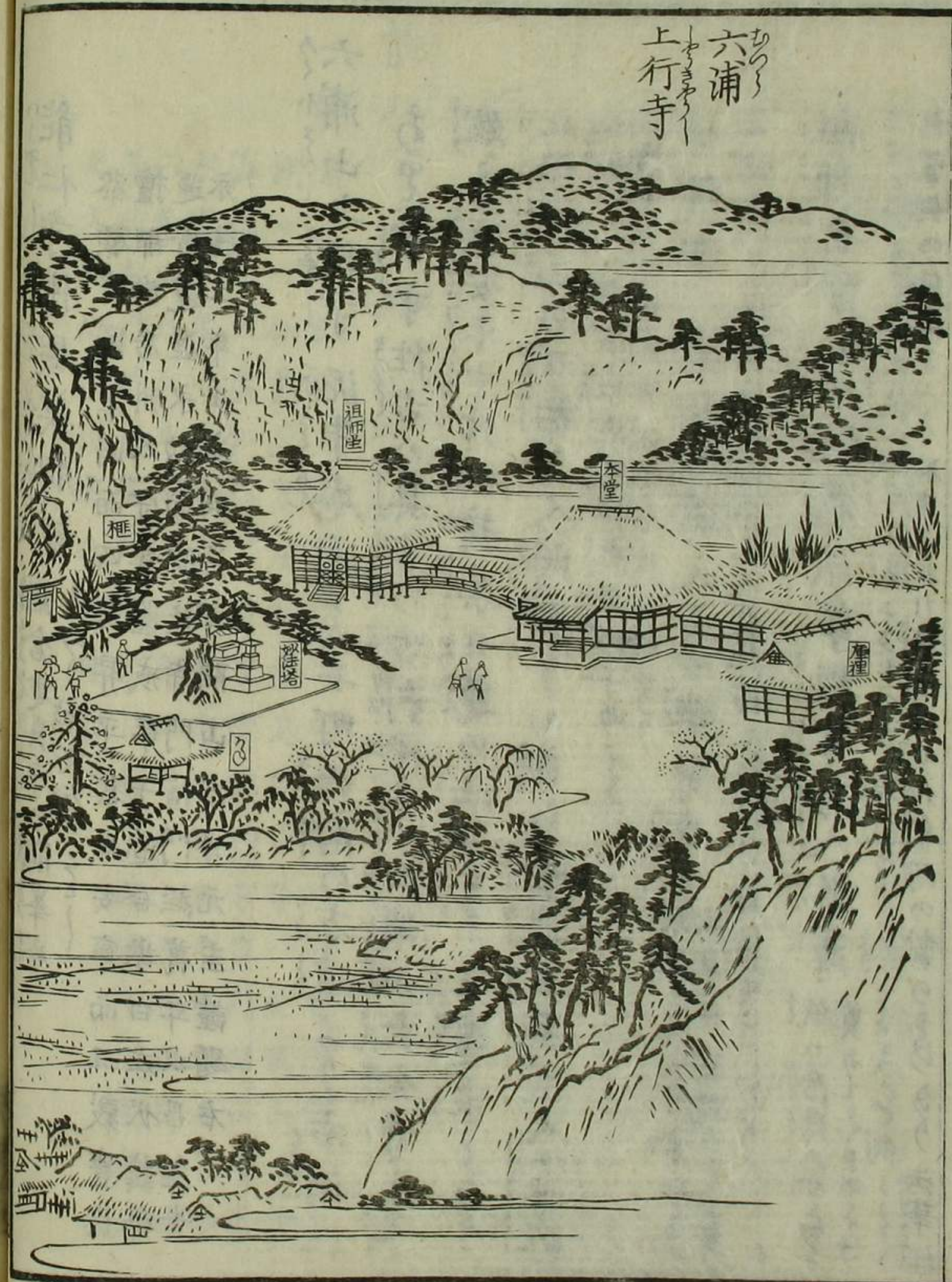
祖師堂 宗祖日蓮大士の像を安んず 座像二尺三寸余あり

祖師木像胎中収蔵法華經書寫人名簿 紙ハ尾用の紙あり

三寸三分の徑筒へ胎中収蔵法華經書寫人名簿 紙ハ尾用の紙あり



六浦
上行寺



八卷小書写の人名簿一卷共九卷あり其文は云く
御身の御經奉書寫之人

一	卷	良圓融律師	日源
二	卷	正圓坊	日秀
三	卷	祐奠坊	日正
四	卷	良範坊	日秀
五	卷	衆寧阿	日秀
六	卷	衆寧阿	日秀
七	卷	衆寧阿	日秀
八	卷	理賢坊	日宣

安立坊の洞山

奉 右願主 卿公沙門
妙法親父

奉 讀誦妙法蓮華經五部

正圓公 上總公 一府同心久讚

奉 方便品 壽量品 陀羅尼品
各十扁宛讀誦之

奉 讀誦 十如是 自我謁 題目百廿反

奉 唱題目一萬反 日源敬白

應 永十三年丙戌十月十三日 御身ノ形相中老日法上人御作也

右六萬恒沙上首上行菩薩此御利益者尔住迹用本
名四字初隨有喜形相身任御附屬妙法之要五字弘一
天四海秘法良藥施萬人所嚴迷者也 廣爰流布因撰純就信
心大施主等之成就所嚴迷者也

釋迦堂 祖師堂の右に並べし 本尊釋迦多寶四菩薩 眞言宗より

六浦妙法日荷上人石塔 祖師堂と釋迦堂との間樞の本にありき
上下とも後人造り添へたるものなり 中股の石の横面は文和二年六月

十三日と彫り付くあり 妙法日荷上人の遺徳を記すに當りて
此法俗稱を荒井平次郎光吉と号す 長六年甲寅日蓮大士北嶺中
此法上人未荒井平次郎光吉と号す 長六年甲寅日蓮大士北嶺中
上人の遺徳を記すに當りて 此法俗稱を荒井平次郎光吉と号す 長六年甲寅日蓮大士北嶺中

蓋し月像ハ中山法華寺ニあり又妙法の住持ハ一曰臨江の金龍院ト米倉家陣屋の
間ハ妙法禪門日荷上人ハ六浦荒井の城主掃磨守ト号スルとあれハ城主トイフ
記ハ妙法禪門日荷上人ハ六浦荒井の城主掃磨守ト号スルとあれハ城主トイフ
或ハ此妙法ハ杉田如法ト号スル北条時頼の臣アリト云あれとも時頼逝スル年歴を
以テ考ルハ小もその時代ナリト云

寶篋印塔 祖師堂の前左の方の山の裾ニあり高き一丈二尺あり刻せり
塔の四面ハ梵字ト刻シ横面中を文治元年の親影ト刻せり

當寺往古真言宗ナリ證ナリ
按小米倉家陣屋の上より上行寺の後山積ハ知足山龍華寺の旧地あり
支院花藏院の門前ハ橋あり号スルハ普龍華寺

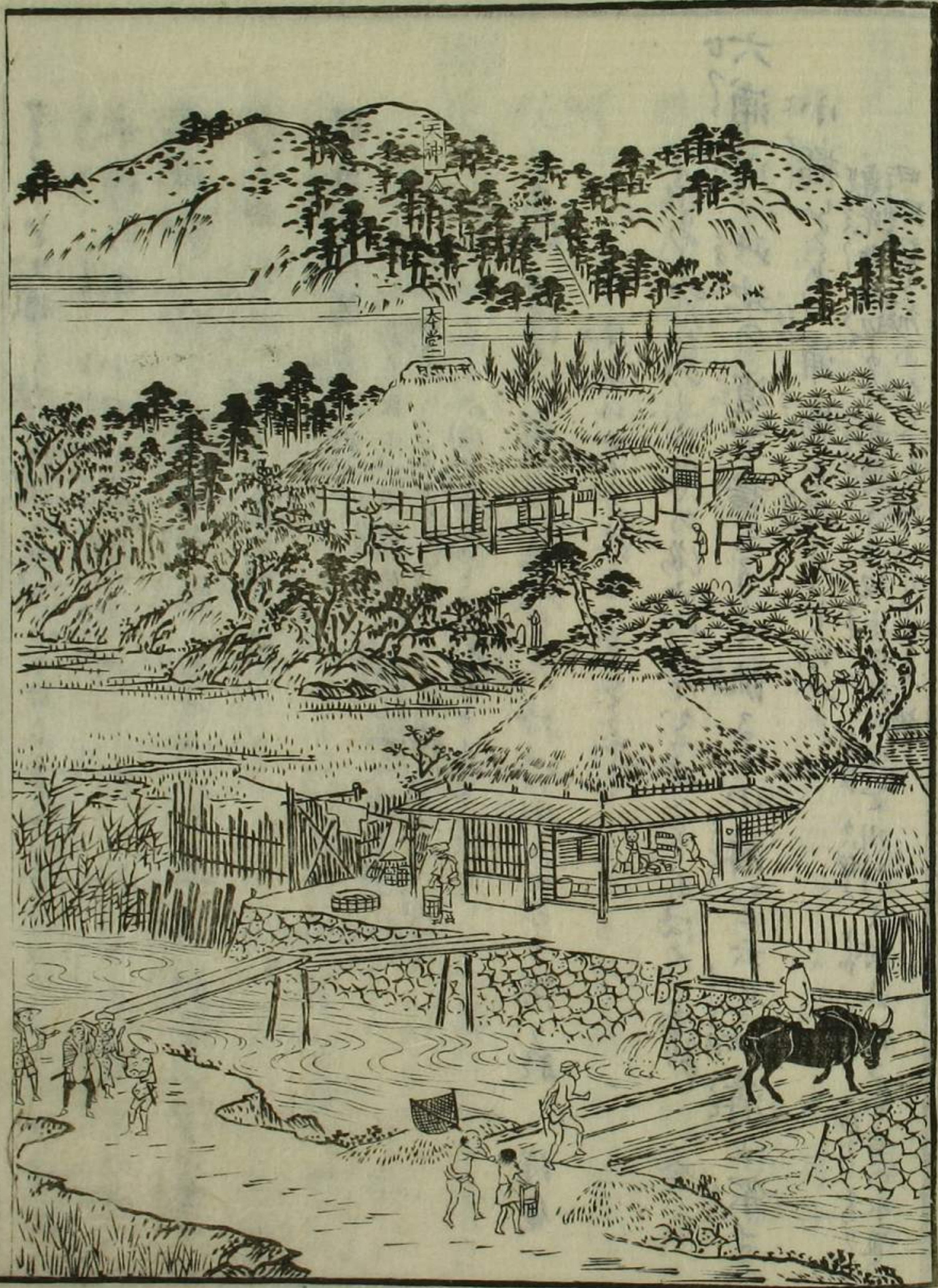
鎌倉志ニ當寺什宝ニ位牌一枚あり日祐上人の筆の曼陀羅を
彫其下に日祐上人一世の間引導せし人の法号俗名哉
奉々應安三年と記せり又日祐上人の大曼陀羅及日蓮
大士の消息等と存する由記されしとも今當寺ニ傳へ
ずと云

金剛山嶺松寺 同所三丁斗を隔て西南の方道より右側ハ
あり禪宗中々建長寺龍峯庵ニ属す本寺ハ持地妙來の

本像を安置せり関山ハ月窓和尚ト号ス 諱ハ元曉紀州の人
二日 儉約翁の法副ナリ傳へ云當寺ハ千葉介胤義の建立ニ
鎌倉志ニ瀬戸明神の鐘の銘ハ神主平胤義トあり神主ハ
平姓千葉氏ナリ此人の建立欵千葉系圖中ニ胤義ト云
有リ寺建立のより詳ナリと云
因ハ云竹葉家累代の
堂城ハ本堂の後園百歩

六浦 東鑑ニ將軍家此地ハ遊覧のより往々ええと云
又同書ニ建久三年壬子二月廿四日丁卯武藏國六浦海辺ハ

北條九代記中田村莊司則義ハ山若丸ニ與シ菅領氏満ニ
召捕鎌倉へ進上しと云と実檢の後六浦の海ニ沈らる
とあり



侍
光傳
寺
侍
光傳
寺
侍
光傳
寺



かきとを捕く六面の沖に沈めをうけりともありく異あり
永祿の頃ハ小田原北条此地を領一六浦亦曾分の地ハ
武田家へ付一同所大道分の地を龍源軒と云ふ付一
た由分限帳よんえくす

澤庵和尚鎌倉記行

あられハ三日鎌倉へ移る一坊をこれハ
野ありこつあむむはの海とこへま
こつ海土の子もれあそみをん

六浦川此地の道を横きりく流る小溝を云又此溝は架す

小橋を云六浦橋と号くといふ

日光山専光寺 嶺松寺より二町計を隔て南の方道よ

右側ハあを浄土宗中々同所天然寺ハ属を本尊十一
面観音ハ立像一尺計あり佛工春日の作なりと云相傳ハ
照天姫の念持佛中々姫松葉ゆく燻らる一時身代
を立と云と云傳へり寺の後の方ハ日光権現の宮ハ
故ハ山号と云

油堤 同一寺の後の田圃を隔てて町を隔て西の方小續き
山を油堤と云由土人云
前鎌倉志中傳光寺の里諺に
照天姫の乳母侍従といふもの姫の粧具を携へ此所迄
尋来りしと云姫の形方あをさるを歎き悲しと彼粧
具を捨く終り此所の川へ身を沈めと云故ハ号とす

侍後川 川村と大間村との中間光傳寺の前を流る川の
と云

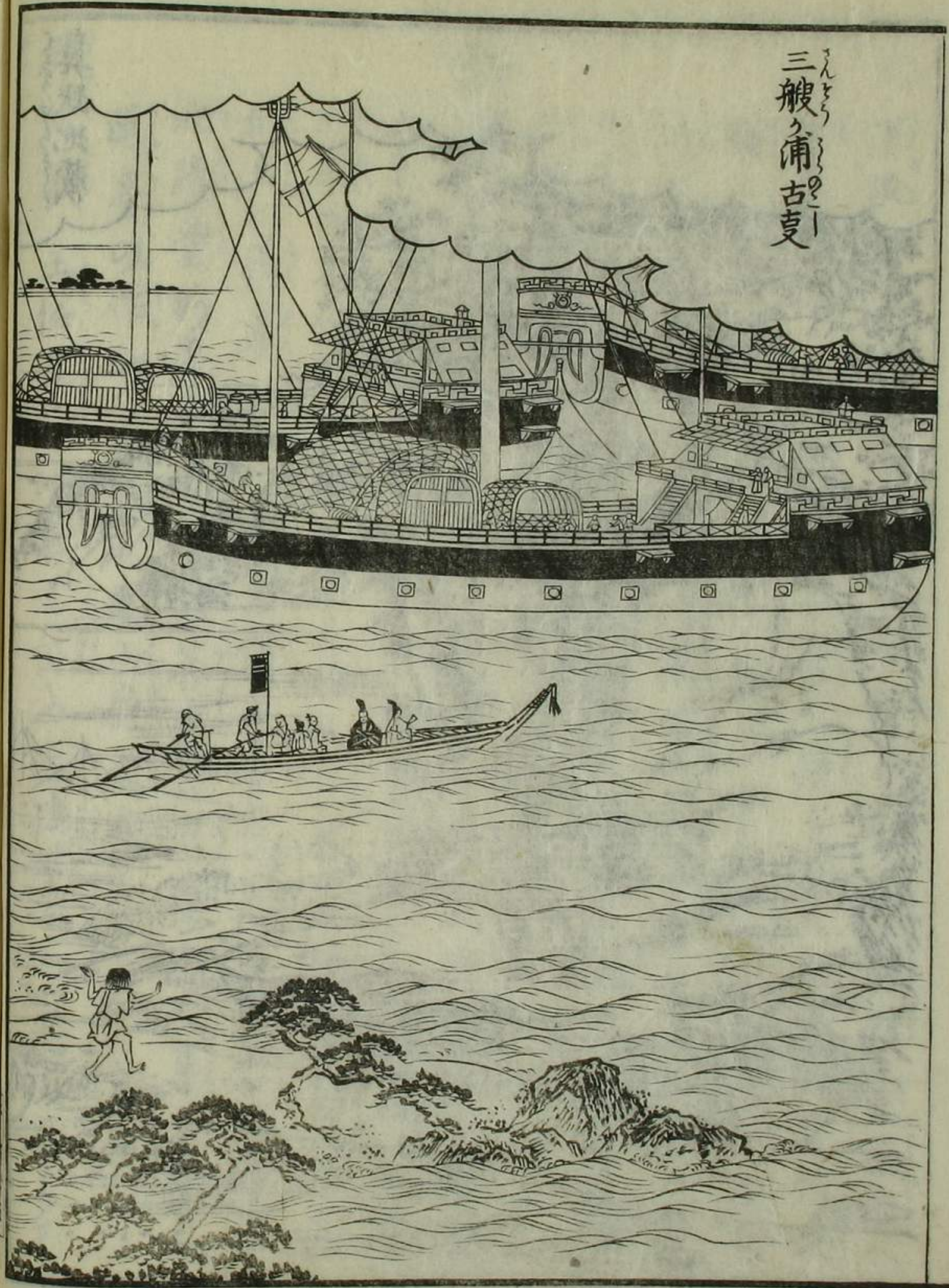
鼻缺地藏



下流をり水源を鎌倉より發し未ハ三艘村あり盛濱へ
ゆく海灣を會を瀬戸街道へ横より架を橋を侍從
橋と号名義ハ油堤の条下よりぬ此橋を渡りて右の
道ハ武蔵相模の國境地蔵の辻へゆく鎌倉へ往還の道
なり南の道の三浦三崎への通路なり左の川傍の道ハ
三艘浦又相州境浦郷等への道なり

常見山光傳寺 同所北の端道より右側侍從川に傍る

あり浄土宗あり鎌倉光明寺に屬する阿彌陀
如来の本像を立像中より四尺許あり作者あり
開山ハ得蓮社忍叟靈傳上人と号門の内右の方
地蔵堂あり本尊地蔵菩薩ハ立像六尺許あり
運慶の作ありと云地福山蔵光寺と号
界地藏 土俗鼻缺地藏と称し光傳寺より九丁あり



三艘之浦古吏

西の方鎌倉道の傍にあり巨巖の壁立し一所に
此の像を鑄せしむる像の鼻缺損也此所ハ武蔵相摸の
國界や一々峠村と号す

三艘浦 六浦の南向三艘村にあり永祿九年の春唐船
三艘此浦に着岸せし故に名付くを鎌倉志云其時
舟に載来り一切経及び青磁の香爐花瓶等も皆
称名寺に傳へありと云

海蔵山太寧寺 三艘浦の東瀬崎村にあり
布金の道場や一々薬師寺と号し真言宗なり一々蒲
御曹司源範頼公生害あり一後其法号を採り太寧寺
と号し千光國師開山とあり一々禪林に轉じ鎌倉建長
寺の属寺とせし薬師寺の号の廢せんを歎き寺前村の地へ
本寺薬師如来立像丈五尺あり十二神將の像ハ三尺あり

あり一々共運慶の作之鎌倉志に當寺勸進帳を引く
云往古 伏見帝永仁年間此村に貧女あり父母の忌
日に當り一々佛に供養し一々き便かり一々絲を繰
巻子と一々を賣り佛餉に備へんと然れども
容易に買人なし或時童子一人来り是を買ふに價を
以て父母の忌日に供養の料に充ちて佛前に至る小
件の多きを多くあり依り知ぬ如来貧女に純孝の志を
感し一々自介以来へを薬師と云とあり
佛へ肩頭をのりあり

蒲冠者 範頼靈牌 定門神像裏に範頼公建久癸丑年八月と
彫り付
範頼墓 本堂の後の山麓にあり高さ二尺六七寸あり
按て異本源系盛衰記に範頼伊豆の修善寺に涉るるを景時
又頼朝に申して伊豆に越景時父子三人五百餘騎ゆく修善寺に押寄せ

範頼ハ或坊よ小祇よ大口計り
其後多謝殺さるる後夫種
其後景時煙を静り範頼の焼首取
とあり鎌倉志よ云く
後を此の地小華を村に詳とあり

題 太寧寺六首

絶海

寺樓一抹晚江煙

朝送鐘聲落釣船

殘曉香消拍子煙

間鷗容我社中眠

聞君去借江村宿

一老來無夢越漁船

六浦遙連三浦煙

越風隨岸幾移船

興來撐棹窮佳處

月落前灣猶未眠

山街夕日水籠煙

雪後蘆花月滿船

盖世功名身外事

幾人能得一菴眠

晚興遲留江上寺

還愛華亭載月船

功名盖世畫交煙

三山翠映白頭眠

一錫歸來楓外寺

失墜危於灑頰船

當寺書院北向瀨戸

白沙翠竹閉門眠

瀨戸の入海を眼下

臨る風光殊小

勝れし寺寶は範頼自筆

古奇の懸幅及び陣中用

宮根推現社瀨崎の東室

本村は又民家の間は犬樟の

老樹あり

又民家の間は犬樟の

雀浦同所の南に出崎を

以菅神の小祠あり故は土人

天神崎とも称を此地の

海灣と浦の江と云

中着巖同所絶壁の下

あり大さ二間四方に

根附巖同所百歩を隔て

西南の方には崖下あり

搜戸湊刀切村の南の入海と云

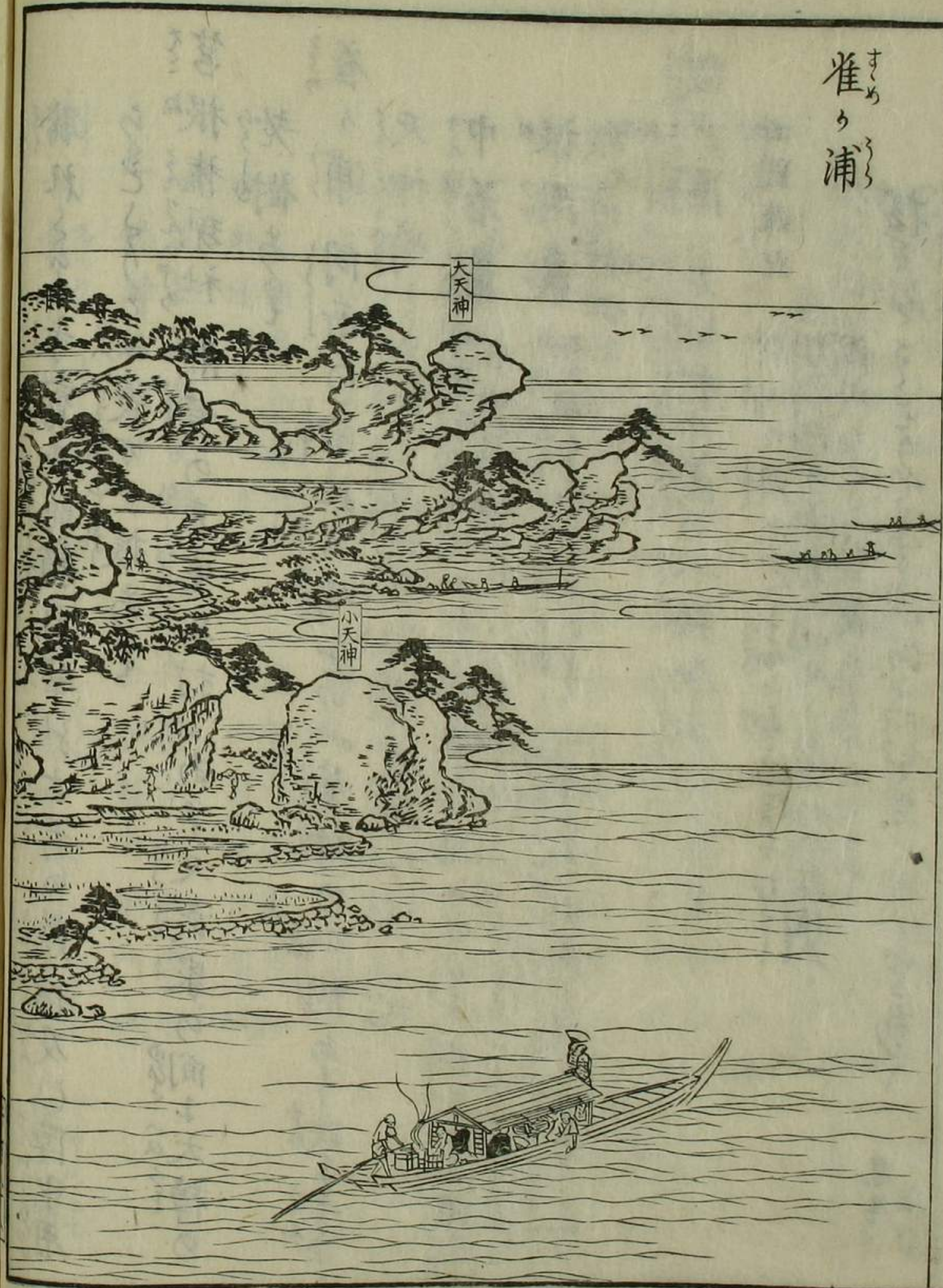
回國雜記

浦川の湊とつる浦ふらふら
浦川の湊とつる浦ふらふら
浦川の湊とつる浦ふらふら
浦川の湊とつる浦ふらふら

道與 准后



す
ま
り
の
浦



鳥帽子島

同所東の出崎の小島といふ形状鳥帽子に似

つる故小名とせり

鎌倉記行 名保一海といふとそをいふ

夏島

同所東にあり長三町餘を横一丁中此小島なり

里人云く玄冬の雪といふとも積りなりといふ

鎌倉記行 夏島を名のとなりて是時ハある

三多ふも降白をたぬぬと云ふ島の名や消らん 浮庵

猿島

夏島の東南にあり五丁四方を占めあり

裸島

同所二三町を占め離れたる小島なり

按て浮庵和尚の鎌倉記行に笠島といふ名と挙げくそ裸小

かきと云ふと云ふの夕時ぬぬぬぬ人ありと

かくあれといふは地と笠島ありとありはあつと云ふ猿島裸島二島の

甲香

此れハ金澤の名産なり兼好法師の徒然草に甲

香ハ螺貝の様なる小くく口の程此細長めく出する

貝の蓋なり武蔵國金澤と云浦にありと所前者ハ

名かきと云ふと云ふと云ふと云ふ野槌小今金澤

めく尋ははといひまははと云ふと云ふ

天竺三藏經

甲香... 法華... 經... 卷... 第... 十... 終

